仮面ライダー 26Riders[Ryuki]Another in 風都

桐型枠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダー　２６Ｒｉｄｅｒｓ［Ｒｙｕｋｉ］Ａｎｏｔｈｅｒ　ｉｎ　風都

【Ｎコード】
Ｎ０２２２Ｒ

【作者名】
桐型枠

【あらすじ】
あらゆる場所で風車が回る風の街、「風都」。ミュージアムが壊滅し、財団Ｘもガイアメモリ事業から手を引いた、その数ヶ月後。左翔太郎と照井竜は、今だ無くならないガイアメモリ犯罪に立ち向かっていた。その一方、風都で謎の失踪事件が発生。更には、「願いを叶えてくれる二種類の怪人」の噂まで流れ始め……。そのうちに何故かディケイド一行が、そんな風都に来訪。事件の解決に向け、動き出す。仮面ライダー龍騎×電王×ディケイド×Ｗ×ＯＯＯのク

ロスオーバー。１５０％趣味のライダークロスオーバー。龍騎のＴＶＳＰ版（オリジナルライダー含）、ディケイド、Ｗ、電王のそれぞれのアフターであり、そこにＯＯＯの介入するオリジナル解釈による小説。

はじめに

はじめに

この小説は、作者の趣味１５０％以上で構成されています。
龍騎×電王×ディケイド×Ｗ×ＯＯＯのクロスオーバーと銘打ってはいますが、
より正確に言えば、「オリジナルの龍騎ライダーを主軸としたクロスオーバー」となっています。

そのため、皆様の思われるような展開にならず、
また、明らかに蛇足と思われるような部分があったり、
あるいは本編において各ライダーの活躍が描かれなかったりといった場合があります。

あらかじめご了承ください。

また、原作への理解不足など多々あるかと思われます。
いかなる場合においても、とかく努力は怠らないつもりでありますので、
指摘すべき部分は指摘いただけると助かります。
また、処女作である拙作をお楽しみいただけると幸いです。

あと重要なこととして。

作者はえらい遅筆です↑

これを念頭においていただけると助かりますです、はい。

1話：Sの出会い／風都とミラーワールドとディケイドご一行

風都を揺るがすあの事件から九ヶ月が経った。
ユートピア・ドーパントを倒して――相棒が消失して、九ヶ月。
ミュージアムは壊滅。財団Xはガイアメモリ事業から手を引き、ガイアメモリによる犯罪は、減少の一途を辿る――。

そのはずだった。

そのはずだというのに、ガイアメモリを用いた犯罪は一向に無くならない。
確かに「減少」はしているのは間違いないだろう。しかし、消滅はしていない。
それは――今も、ガイアメモリを製造する人間がいるという事実に他ならない。
それが誰か？　相棒がいれば分かるのかもしれないが、今はその方法を取ることはできない。
必然的に、自らの足で動いて、ガイアメモリの流通元を探らなければならないのだ。

故に、左翔太郎（ひだりしょうたろう）は迷っていた。

「……なんじゃこりゃあ」

迷うとは言っても、別に依頼を受けることに対しての迷いではない。
そもそも、金銭的に厳しい事情のある鳴海探偵事務所において、依頼の選り好みをするような我らが所長様ではないし、

何よりガイアメモリ関連の犯罪については、翔太郎自身、乗り気で挑んでいる。

そこまではいい。

そうして翔太郎が捜査に乗り出した数十分後――彼の前に姿を現したのは、上半身だけの化物だった。

いや、正確に言えば、「上半身が地面からせり出し、下半身が空中から飛び出している」といった、

……見るからに異様な風体の怪物なのだ。

そして、その怪物は先程からしきりに同じ言葉を繰り返している。

――お前の願いを言え、と。

「……」

訳が分からない。

というより、これは噂に聞くあれか。「願いを叶えてくれる怪人」というやつか。

翔太郎も、噂程度には聞いたことはあった。しかし、こうして目の前にしてみると、どうにも違和感は拭えない。

むしろ「サンド・ドーパント」と呼称したほうが、よりしっくり来る。

もうさっさと変身してメモリブレイクした方が早くねえか？

そんなことすら思いかけ、翔太郎は軽く咳払いをしてその思いを振り切った。

振り切るのは照井の専売特許だがそんなことは関係ない。関係ないったら関係ない。

「どうした、お前の願いを言え」
「……はぁ」

どうしてこうなった。
随分前、園咲霧彦（そのざききりひこ）に向けて言い放った言葉が翔太郎の頭をよぎる。
あとパソコンの前で踊り狂う人影。なんだこりゃ。
ともあれ、この「砂」が、いわゆる「願いを叶えてくれる存在」であることは確かなようだ。
経験上、どのようなことを要求されるか分かったものではないというのが、翔太郎の本音だが。

「あー、どうすっかなぁ……」

当然ながら、この思索は、「眼前の怪物をどうするか」というものである。願いを決めかねているわけではない。
この怪物がドーパントであるならば、四の五の言わずマキシマムドライブゥ！　メモリブレイクゥ！　で済む話だ。
……まあ、探偵である以上は、まずは言葉で接することが重要であるわけなのだが。
そもそも、明確に敵であると確定していないのに変身すること自体が間違っている。
と。
そんなことを考えていた折だった。

「ど、どいて、どいてどいて、どいてくださぁぁぁ〜い！」

――そんな声と共に、自転車が爆走してくる。
ブレーキが壊れているのか、あるいはもっと何か別の要因があるのか、
しきりに両手を握り絞めているのだが、自転車が止まるような様子は見受けられない。

「あっぶねえ！」

翔太郎は、少年の言葉通りにその場から飛び退く。
対し、砂の怪物は翔太郎の方を向いているため、何がなんやら理解しきれていない。
当然――自転車に轢かれることとなる。
バシャァ！　という音と共に、自転車が砂の怪物を通り抜けていった。

「ひいえええええぇぇぇぇー……」

通り抜けていく。
――その先にあるのは、崖だというのに。
ちなみに当然ながら、安全のために鉄柵が設けられてはいるが、

その鉄柵にしても、経年劣化のせいかどうかは不明だが妙な角度に倒れ掛かっている。
このままの速度で突っ込めば――大ジャンプ、確定。

「うおおぉぉぉぉっ！？」

思わず、翔太郎は駆け出していた。
「ハーフボイルド」などと呼称される所以。それは、彼のお人よしさ加減にある。
ハーフボイルド（未熟者）故にハーフボイルド（度を越えたお人よし）。
だからこそ、翔太郎の採るべき選択肢に、この不幸な少年を「助けない」というものは存在していなかった。
暴走する自転車に走り寄り、荷台部分の金具を思い切り握り締める。
――それだけで。あっけなくも、自転車は停止した。

「うお、おおお、ぉぉ……おお、大丈夫か、少年」
「は、はいい。あっりがとうございます……」

慣性の法則がある以上、無論、翔太郎の腕には大きな負荷がかかっているわけだが、
ともかく、翔太郎としては、眼前の少年が無事だったことが喜ばしかった。
指は痛いが。

「ふぅっ……操縦には気をつけろよ――少年。俺じゃなきゃ、そのまま飛んでってたかもしれねえぜ」
「あ、その、ああ、ありがとうございます」

ある程度落ち着いてきたからだろうか。
少々格好を付け、翔太郎は、軽く少年を指差しながらそう告げた。

あのまま突き進めば再建間近の風都タワーにでも突き刺さっていたのではなかろうか。
もしそうなら、二度目の倒壊か。笑い事じゃない。

「でも、あの……大丈夫です。僕、こういうこと、慣れてますから……」
「はぁ？　お、おいおいおい、大丈夫かよ……」

こんなとんでもないことに対して、「慣れている」と、平然と言い放つことができるような人間がそうはいるわけがないだろう。
……が、なんとはなく、翔太郎は、それが真実だと察していた。
経験上、「不幸」を強調しすぎる人間は、本当に不幸であるとは言えない。
対して、本当に不幸である人間に関しては、諦観の念を見せることが多いのだ。
目の前の少年のように。

「あの……すみません、あなたの、その……足下、なんですけど」
「あん？」

と、少年の指摘に対し、翔太郎が足元を見る、と――。

「何じゃこりゃあ？」

砂。
砂。砂。砂。砂。砂。
砂が溢れ出していた。
排出しているのは、翔太郎の体からだろうか？
気持ち悪ィ、と翔太郎が呟くと、少年は、

「……その、イマジンが、憑いてる、みたいなんですけど……」
「いまじん？　何だそりゃ」

ジョン・レノンか？

「……えっと。その。『願いを叶えてやる』って言ってる、その、怪人っていうか。そういう砂みたいなのなんですけど」
「砂……てえと、アレか。さっきの」

砂の怪物――便宜的に、翔太郎は「サンド・ドーパント」などと名付けたのだが、
あれが、イマジンというものであるらしい。

「で、その怪物のことを知ってる少年は――いったい、何なんだ？」
「あ、あ、申し送れました。僕――」

そう言って、少年は体中の埃を払い落とし、自らの名を名乗った。

「――野上良太郎（のがみりょうたろう）っていいます」

――午後二時五十分　風都内

――ミラーワールド

鏡面世界の中――そこで、壮絶なまでの戦いが、繰り広げられていた。
――片や、西洋の騎士を思わせる、紺色をベースとした色彩を持つ仮面ライダー
――ナイト。
――片や、黄金の輝きを持つ鎧を纏い、黄金の羽根を散らす王たるライダー
――オーディン。
そこに慈悲や躊躇いは何一つ見受けられない。
ただ、そこにあるのは、互いの願いのみ。
――誇りだの矜持だの、あるいは信念だのといったものは、この戦

いにおいては邪魔なだけだ。
それは、戦いを躊躇させる要素の一つでしかないのだから。

「うおおおぉぉぉあああぁぁぁ！！」

騎士――ナイトが絶叫を上げ、自らの武器、翼召剣（よくしょうけん）ダークバイザーでオーディンに斬りかかる。
が、そこにオーディンの姿は無い。まるで、テレポートでもしたかのように、忽然と姿を消していた。
跡に残るのは、黄金の羽のみ。

「そこだぁ！」

――だが。
それを見計らっていたかのように、ナイトは背後に向けて攻撃を繰り出した。

『むっ……』

見計らっていたかのような、的確な攻撃。
しかしその一方で、その攻撃には腰が入っていない。体重も乗っていない。
――あまりに中途半端な一撃だ。
だからこそ、オーディンは今も立ち続けている。微動だにすら、し

ていない。
故に、オーディンは告げる。――この程度か、と。
だからこそ、ナイトは告げる。――そんなわけがないだろ、と。

「今度こそ、お前を倒す――！　絶対に！　絶対に！」
『本当にそれができると思っているのか？』
「できる……いや、やるんだ！　やらなきゃ、何で蓮が死んじまったのか、分かんねえだろ！」

根拠はいくらでも用意できる。
――それこそ、この場においてナイト＝城戸真司（きどしんじ）の用いていない策は多い。
馬鹿だ馬鹿だと言われようとも、彼は戦闘においてはこと強力なまでのスペックを発揮する。
それこそ、通常の状態ですら、王――オーディンと、戦うことができるほどに。
加えて言うなら、彼は未だ、アドベントカードを使用していない。
であれば。
ナイトはバイザーの翼の部分を展開し、腰元のカードデッキから抜き取った一枚のカードを挿入（ベントイン）した。

《ＳＵＲＶＩＶＥ》

バイザーが電子音を発し、それに伴ってナイトの姿が変化していく。
より先鋭でより強固な――青く、金色がかった追加装甲が構築されていく。

――ナイト《サバイブ》――

真司にとっての切り札であり、また、ミラーワールドにおいて唯一オーディンに対抗しうるカード。そのうちの一枚――《疾風》。

そして、ナイトは更なる一枚をデッキから抜き取る。

《ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ》

音声と共に、バイザーがその姿を変える。
槍にも近い形状の、《ダークブレード》と呼ばれる姿に。

「行くぞっ！」

その言葉と共に、黒い旋風とと黄金の羽根が激突した。

――同時刻　　風都内

――光写真館

旅。
それこそが、ディケイドこと門矢士（かどやつかさ）にとっての「世界」である。
その基点となる場所――それが、この光写真館だ。
生活空間となる場所には、ディケイド本人、門矢士に加え、クウガこと小野寺ユウスケ、

そしてこの光写真館の一人娘である光夏海（ひかりなつみ）の三人が揃っていた。
そこに、店主である光栄次郎（ひかりえいじろう）の姿はない。恐らくはキッチンにでもいるのだろう――と、士は考える。
本来であればもう一人、友人とも呼ぶべき男がいるはずなのだが、そこにはいない。
誰も口を開けないような緊迫した状況の中――唐突に、ユウスケが口を開いた。

「なあ、士……この世界は何なんだ？」
「……これは……」

写真館の背景ロール――普段、彼らが世界を移動する際に使用し、次に進むべき世界を明示するための道具だ。
そこには、風車が描かれていた。その周囲にはＵＳＢメモリに似た装置――ガイアメモリ。
これだけを見れば、【Ｗ（ダブル）の世界】だと断ずる事もできるだろう。
しかし、そうではなかった。
風車の間を走り抜ける電車は、これまでに一度、目にしたことのある電車――つまりはデンライナーだ。
加えて言うなら、その進路上には鏡――鏡面世界には、ミラーモンスターと思しき影が見える。
そして、絵の中にはメダルらしき物体も散見される。
つまりは。

「……分からん」
「はぁ？　何だそりゃ？」
「分からねぇもんは仕方がねえだろ。だが、大体分かった」

ふん、と得意げに鼻を鳴らし、士は断言する。

「キバやブレイドにも、平行世界がある。以前俺の前に現れた剣崎(けんざき)一真(かずま)や紅渡(くれないわたる)の存在を考えれば、それは簡単に分かるが……。

だったら、以前に俺が回った電王や龍騎、

これはまだ通りすがっちゃいねえが……ダブルの平行世界があってもおかしくはない。

加えて、このメダル――恐らくはコアメダル。つまりはオーズの世界だろう。

これはその四つの世界が融合したものだと考えればいいってことだ」

「そういうことですか……でも、士君、服装も髪型も変わってませんよね？」

夏海の指摘ももっともだ。

通常、ディケイドである士が世界を回る際、その世界に合わせて、士の役割・服装が確定する。

例示すれば、クウガの世界では警官、龍騎の世界では弁護士――といった具合だ。

であるはずなのに、世界を移動した後の士に、何ら変化は見られない。「いつもどおり」の姿の士だ。

「それだけこの世界が異質だってことだろ。ライダー大戦の世界よりも中途半端に世界が融合してるわけだからな」

ありとあらゆるライダーの世界が融合したライダー大戦の世界。
その世界の中での士の役割は、ガイ――アポロガイストの結婚式の客だった。
それは明確に定められた役割とは言い切れず、むしろ士自身がその役割を「破壊」したというフシがあるが。

「なんにしても、まずは情報収集だ。行くぞ、ナツミカン、ユウスケ」
「ああ……って、そういや海東さんは？」
「知るか。海東ならそのうちひょっこり出てくるだろ」

ぶっきらぼうに返答しながら、士は「旅の仲間」である海東大樹（かいとうだいき）のことを思い浮かべる。
以前は敵対する事も多かった間柄ではあるが、あの「大戦」を経て、ユウスケや夏海の他に「仲間」と感じた、数少ない人物だ。
とはいえ、コソ泥紛いのことばかりしている以上はあまり尊敬できない人間ではあるが。

「ともかく、海東のことは今はどうでもいい。行くぞ、ナツミカン」
「夏海です！」

毎度毎度の訂正をしつつ、士は夏海とユウスケと共に、写真館の外に出た。

「……そういえば、二階なんてあったっけ……？」

いつもなら、写真館は一つの建物と置き換わるのが通例だ。しかし、今回に限ってはどうもその限りではないらしく、彼らの直上には、二階部分と思しき場所が見受けられた。いつもと違う――そのことに対し、ユウスケはしばし考えをめぐらせるが、

「ま、いっか」

と、思考をやめ、ユウスケは自身のバイク――トライチェイサーにまたがった。

知らない以上は当然ではあるものの、「今回」の光写真館が置き換わった場所は、もっとも仮面ライダーに近しい場所だった。それ故に、光写真館の上部――二階部分へと繋がる階段の案内板に表記されている文字に、士たちが気付くことは無い。

――鳴海探偵事務所、という文字に。

「あれ？　みんな、もう出かけちゃったのか……晩御飯までには帰ってくるんだよ～」

栄次郎の言葉が三人に聞こえていたかどうかは定かではない。

1話：Sの出会い／風都とミラーワールドとディケイドご一行（後書き）

……はい。
まず一話です。
誤字脱字とかねーかなぁ；

まず一つ、タイトルにオーズの登場を匂わせたのに全く出てこない
というこのとんでもねえ矛盾！↑
ともかく私に死ねと申すか。

とりあえず、今回はオリジナルライダーは登場しませんし、
まずはオリジナルキャストのお目見えという程度で。

っても映司出て来ねえけど↑

とりあえず私は非常に筆が遅いことを改めてお伝えしておきます。

最悪一月に一度ペースなんじゃないかなー↑

多分ライダーはタイトル以上には増えないと思います。
あくまでも、多分。

2話：Tの奔走／鳴滝の暗躍（前書き）

今回ようやくOOO組とオリ龍騎組の登場です。
戦闘シーン？　まだ無いでごぜえます←

2話：Tの奔走／鳴滝の暗躍

――午後3時２０分　風都警察署　超常犯罪捜査課

風都という街は、元々、ガイアメモリの実験場であった、という特異性故に犯罪が多かった。
現在でもそれは同様。
――元々、犯罪の件数は多かったのだ。そういった事例があったからこそ、結果として犯罪者が増えたのだとしても不思議ではない。
……が、その一方で、犯罪件数が多かろうが「再犯率」は高くない。
その理由はごく単純。

風都警察署……その超常犯罪捜査課に所属する刑事、照井竜（てるいりゅう）があまりにも優秀であり「すぎる」からだ。
彼の年齢で警視に昇進するという事例はそう多くない。それどころか稀――異例ですらあると言える。
おおよそ警官らしくない、赤い革ジャンのライダースファッション。
稀に青い服を着用する事もあるものの、その特徴的な服装は、ある意味で超常犯罪捜査課のシンボルとなっている。
そして、加えて言うなら――彼は、風都の守護者の一人「仮面ライダー」である。

仮面ライダー「アクセル」。
バイクをモチーフとした形状の深紅のボディ。
超重量と凄まじいまでの切れ味を誇る剣――エンジンブレードを所持し、
ドーパントとの戦闘においてはパワーを重視した戦闘スタイルを取る。

また、まったくの余談ではあるが、結婚秒読みの恋人がいる。
それも、その相手が鳴海探偵事務所の所長――鳴海亜樹子（なるみあきこ）だと言うのだから、
所員であり探偵である翔太郎は最高に驚いていた。とはいえそれはその「当時」の話だが。

「……」

その特徴ゆえに風都警察署の捜査能力は非常に高い。
それこそ、翔太郎の「相棒」――フィリップが健在であった頃、彼の「本棚」の検索能力に貢献し、犯人を特定するほどには。

そうでなくとも、時間をかければ相応の成果を得ることができるのが、風都警察署だ。
戦力や人員期待して鳴海探偵事務所に頼ることもあるにはあるにせよ、
その捜査能力は彼らに勝るとも劣らないものがある。

――とはいえ。

フィリップが消失してからというもの、だというのにガイアメモリ犯罪は増える一方。
この日も、照井はその処理に追われていた。

「刃野刑事」
「うい……何ですかな照井刑事」

「――俺は常々考えていたのだが」
「何でしょうかな」

照井は周囲を見渡す。
――今現在この場にいる人間。

照井。
刃野刑事――本名、刃野幹夫（じんのみきお）
真倉刑事――本名、真倉俊（まくらしゅん）
計、三人。

「……増員を考えるべきではないのか」

元々、超常犯罪捜査課は、急増するドーパントの……ガイアメモリ犯罪の取締りのために設立された部署だ。
当然ながらその構成員は、ガイアメモリについてそれなりの造詣がある人物が殆どである。
だが。
――そもそも、ガイアメモリについて造詣の深い人間が、そうそういるものだろうか？

超常犯罪捜査課に勤務するとはそういうことだ。
ガイアメモリについての造詣が無ければ、そもそも構成員として機能しない。
人数不足も深刻だが、こういった点が増員を見送る原因になるのは当然ではある。

「ええまあ……そりゃあこっちとしてもそれは思いまして、申告しましたけどねぇ」
「……ああいったことがあった以上は、ということか」

照井はふと、十数ヶ月前の事件を思い返す。
九条綾（くじょうあや）――「T」。トライセラトップスのメモリを所有していた女刑事だ。
ロス市警からの出戻り。超常犯罪捜査課に配属になっていた。
本来は復讐を目的としていたはずが――結果として、メモリの力に呑まれ、警察を裏切る形となってしまったあの事件。
同じようなことが起こることを懸念しているとすれば、あるいは。

「だからと言って、このまま手をこまねいているわけにもいかんだろう」

溜息をつき、照井は立ち上がる。

「刃野刑事。しばらく外出してくる。すまないが、あとは頼む」
「はい、了解ですよー。あ、真倉、お前は昆布茶買ってきてくれ」
「またっスか！？」

うん。軽く返答し、刃野はにやりと笑った。
真倉は不平をこぼしつつ、部屋の外へ駆け出した。

――午後3時38分　風都　マンション日下部　913号室

出不精かつ人見知り。
来栖弘人（くるすひろと）という青年について、
――世界を渡る破壊者の宿敵、鳴滝（なるたき）の感じた印象はその一言で言い表すことができた。

「……」

弘人の眼前に降りた灰色の帳。
そこから姿を現したのは、屋内であるというのにフェルト帽を被り、コートを羽織る、眼鏡を掛けた中年の男性だった。

誰でしょうか、と訊ねるその言葉からは、明確な不安と疑問が表れている。
いや、当然であろう。そもそもこのような非現実的な光景を目にし、不安を浮かべないような人間がいるはずはない。
鳴滝の印象通り、来栖弘人という青年が人見知りする人間だとするなら、この反応は当然だろう。
いや――というよりも、そもそも、この非現実的な光景に対し、何かしらの「恐れ」の反応を示さない人間がいるわけがないのだが。

それにしても。
本当にこの青年でいいのだろうか――そんな疑問が鳴滝の胸に浮か

ぶ。
この反応は、少々予想外だ。いや、想定の範囲内ではあるが。
いや、それとも、この非現実的な事象に対し、はしゃぐわけでも、驚いて冷静な思考を手放すでもなく、眼前の人物――つまりは鳴滝の人となりを訊ねるのは、あるいは賞賛に値すべきか。
なんにしても、それは予め決定していたことだ。……今更、人選を変えることなどできない。

「――私の名は鳴滝。予言者だ」
「……はぁ。そうですか」

弘人は鳴滝を胡散臭そうな目で見据えた。

――当然かッ……！

これまでに何度か名乗った自らの称号。自分自身ですら少々胡散臭いと感じているのに、この青年――つまりは、弘人が胡散臭いと感じないわけがないのだ。
そもそも、こうして突然現れた人間が、「私は予言者だ」などと。
アホでもなければ信じないだろう。
当然ながら、そこまでアホなら、鳴滝は彼の前には現れていない。
鳴滝は軽く咳払いをしながら、弘人へ告げる。

「すまない。突然な話だが、こうでもしなければ君とコンタクトを取ることはできないと認識したのだ。無礼は詫びよう。しかし、少しばかり話を聞いて欲しい」
「……はあ。構いませんが」

ほっと鳴滝は胸を撫で下ろした。
これで「帰れ不審者」などと言われた日には、「おのれディケイドォォォ！」と叫ぶどころの話では済まなかっただろう。相手はディケイドじゃないが。もしもそうだったらどんな偶然だ。

「……君は、仮面ライダーという存在を知っているか？」
「はあ。それはまあ、風都の住人ですから」

風都の住人である以上、風都を守る者の名を知らないはずはない。
とはいえ、それはあくまでも通称なのだが。

「――この世界には、その仮面ライダー……ダブル以外にも、複数の仮面ライダーが存在する」
「……アクセルのことですか？」
「いや、確かにアクセルもそうだと言えるが、もっと別のモノ……そう、別なテクノロジーを用いたものだ。そう、別の世界の技術を用いた――ね」

別の世界の技術。
それは……

「それはつまり、ガイアメモリを用いて変身するという以外の方法があるということですか？」

「……ガイアメモリを知っているのかね？」
「ええ……というより、エターナルの事件を知っていますから」

エターナル。
――仮面ライダー、エターナル。

ＮＥＶＥＲ……「ＮＥＣＲＯ－ＯＶＥＲ」＝「死を超えるもの」の部隊の隊長である大道克己（だいどうかつみ）によって引き起こされた、風都を揺るがす二つの事件のうちの一つ――その際に現れた、自称、仮面ライダー。
彼が風都タワーをジャックした際に流された放送――そこで、ガイアメモリの存在が、完全に公なものになった。
一年近くも前の話になるというのに、その記憶は真新しく、錆付いた様子は見られない。それどころか、こうして会話を重ねるごとに、徐々にその事件のことを鮮明に思い出してくるくらいだ。

「そうか……ならば話は早い。私は、君にその『全く違う技術のライダーシステム』を渡しに来たのだよ」
「……え？」

その申し出がどういうことなのか――　一瞬、弘人はその意味を理解しかねていた。
いや、それもあるいは当然のことか。
というよりも、怪しすぎて受け取ることに対して躊躇いがある、と言うべきか。

「これが、そうだ」

鳴滝は、懐から一つ、薄く、黒い箱のようなものを取り出した。
箱――中身はよく見えないが、カードのようなものが見える。
何だろうか？弘人はそう思いつつも、それを訊ねることをしなかった。

「……君には、願いはあるか？」
「願い？」

唐突に問いかけられた鳴滝の言葉は、酷く抽象的なものだった。

「……と言われましても。平穏な生活、としか」
「……」

渡し辛くなってしまった。

「……この世界には」
「はい」
「ライダー同士が、自らの願いを叶えるために戦う舞台――ミラーワールドがある」

鳴滝は、自らの知識を語りはじめた。
というよりも、願いが無いなどと言われては、こうしてどうにか誘導するしかない。
弘人はほうほう、と適当に相槌を打っている。

「ミラーワールドには無数の怪物――ミラーモンスターが蔓延っている。このモンスターの最大の特徴は……人間を鏡の中へ引きずりこみ、食うことにある」
「……」
「……この怪物は、同じミラーモンスターの力を用いなければ倒すことは難しい。そしてその力を借りるのが――このライダーシステムだ」

成程、と弘人は軽く納得したように頷いた。
目には目を、歯には歯を、ということだろうか。ガイアメモリの力を用いてガイアメモリの犯罪に立ち向かう仮面ライダーのことを考えれば、納得するには容易い。

「……そういえば、さっき、願いを叶えるために戦う、とかなんとか」
「そうだ。ミラーワールドの中では、各々が願いを叶えるために、生死を賭けたライダー同士の戦いが行われている。当然ながら、それぞれのライダーはミラーモンスターの力を借りている。となれば、同じライダーは、それに対抗するために、人食いのモンスターの力を借り、戦っている。正直なことを言えば――私は、君にこの戦いに参加してもらいたい」

鳴滝の言葉に、弘人は軽く眉を顰める。
弘人に何一つの願いが無いことを理解していてなお――命を賭けて戦え、と。そう言っているのだ。この男は。
それに気付いた……というよりも、最初からその事実を認識していた鳴滝は、顔を伏せて申し訳無さそうにした。

「……虫の良すぎる話だったな。いや、なんでもない、忘れてくれ。これは、私の失言だった」

それでは。そう言って背を向けた鳴滝に――しかし、弘人は呼びかける。

「待ってください」
「……？」
「……俺は、そんな生死を賭けた戦いになんて巻き込まれたくはありませんし、何より、このまま安穏と過ごしていたい。そう思ってます」

であれば、何故呼び止めたのか――。そうは思ったが、弘人は続ける。

「ですが、それを脅かす怪物がいるのだと言うなら、俺はそれを打倒します。――それに、知り合いも言ってたんですよ。『手が届くのに手を伸ばさなかったら、死ぬほど後悔する。それが嫌だから手

を伸ばすんだ』って。もしも俺がこのシステムを受け取らずに当たり前のように日常を過ごしていたら、俺だけじゃない、知らない人だろうと俺の友達だろうと、見境無しに死ぬ可能性があるんでしょう？」

そうだ、と。鳴滝は返す。

「だったらそれを受け取らない理由はありません。――勿論、生死を賭けた戦いになんて、参加したくありませんが」
「……えらく中途半端な台詞だな」
「それは、まあ。我が身可愛さというやつで。人間に皆備わっている自己愛とでも言うんですか」

偽善的だな、と鳴滝は笑った。
それが人間です、と、弘人は唇の端を持ち上げた。

「ああ、そうだ。そのカードデッキはモンスターと契約していない状態だ。だから、まずはモンスターと契約しなければ戦うにも戦えないぞ」
「……渡しに来たんなら、その辺サービスしていただけていたら助かったんですが……」

その辺りは仕方が無い。そもそも、それができたら始めからやっている。
おどけて言ってみせる弘人に、鳴滝は苦笑して見せた。

「それにしても……だ」

ふと、鳴滝は、自身の胸中を語る。

「この世界の姿は異様だ」

と、唐突に、鳴滝は弘人に告げた。
何の話だろうか？　と、弘人は考えるも、それを指摘することははばかられた。
それを語る鳴滝の表情が、あまりにも真剣だったからだ。

「全く違う世界のライダーであるはずの者が、全く違う技術で作られたライダーが、この世界には複数存在している。
　これは……本来あってはならないことだ」
「そうなんですか？」
「ああ。だが、私は……少しの間とはいえ、この世界を見て回って、そうではないのかもしれない、と思い始めている。もしかすると、この世界は、こういう形であるからこそ、成り立っているのではないのか――と。だから、もしもバトルに参加し、勝ち残り……そして君一人が生き残るような状況に陥るなら――これだけは、頼む」

そう言って、鳴滝は頭を下げて。

「この世界の本質を見たとしても、絶望はしないでくれ。そして――正しい選択肢を、選び取ってくれ」

それだけを告げて、その体は灰色のオーロラによってこの世界から消失した。
どこへ消えたのか。それは定かではない。まったく見た事も聞いた事もないような方法で現れ、消えたのだ。当然だろう。
跡に残ったのは――鳴滝の置いていったカードデッキだけだった。
直後、インターフォンが鳴り響く。
誰だろう？　弘人は考えるも、彼は友人がそもそも少ない。
前述の知り合いがこの場所を訪れることは殆ど無いと考えてもいい。
――となれば。
弘人はカードデッキをポケットに収め、玄関に向かった。

「はい？」

呼びかけながら扉を開く……と、そこには、特徴的な赤い革ジャンを着用した刑事――照井竜が立っていた。

「久しぶりだな、来栖。三ヶ月ぶりか？」
「四ヶ月半だ。珍しいな、こんな時間に」
「少し話がある。上がってもいいか」
「ああ。適当な椅子にでも腰掛けるといい」

そうさせてもらう、と、いつものように遠慮なく、照井は近場にあった椅子に腰掛けた。

弘人と照井は顔見知りの関係だ。
顔見知り――というよりかは、むしろ、協力、利害関係にあると言った方がより正確ではあるのだが。
元々、フリーランスのプログラマである弘人は、それなりに風都警察署と繋がりがある。
サイバー犯罪に関してのアドバイザー、といった立場だろうか。
無精・短気・傲慢、といった、プログラマーに必要な、効率、再利用性、処理速度、品質を求める自尊心を言う三要素が限りなく薄い弘人は、基本的に自らの「知識」を用いてプログラムを組んでいる。
本職――というより、本来的な要素を全て持つプログラマにはまったく劣る彼が組むプログラムは、基本として教科書に忠実で、まったくと言っていいほど面白みが無く、商品的な価値が薄い。
だからこそ、アドバイザーとしての腕に限って言えば、他人よりも秀でていると言える。
とは言え、それ以外の腕が秀でていないわけではないが。

「……コーヒーは、出さないぞ？」
「いや、それはいい」

そもそも、照井の方がより美味いコーヒーを淹れることができるのだ。
他人に淹れさせるくらいなら自分が淹れると公言する人間は伊達ではない。

「……で、一体何の用なんだ？　仕事だったら嬉しいんだが」
「俺に質問をするな。そこは俺から話す」

相変わらずの態度に、弘人は嘆息する。
質問されることが嫌いなのは相変わらず……どころか、どことなくエスカレートしているような気もする。以前会った時はここまで些細な「質問」……というよりも「疑問」に対して、この口癖を使用することは少なかったはず。
とはいえ、以前のように完全な拒否の反応ではないのが、まあ救いと言えるか。
で。と、弘人は続きを促す。

「今日俺がここに来たのは、現在の超常犯罪捜査課についての相談があるからだ。警察の部外者に相談するのは、少しばかり抵抗があるが――聞いてくれ」
「散々、アドバイザーとしての立場を要求してるっていうのにか」

はは、と、弘人はからかうように笑う。

「その点に関しては申し訳ないとしか言いようが無い。が、この件は色々と切実でな……」
「……いつになく神妙だな。分かった。聞こう」

そうして、照井は現在の超常犯罪捜査課の問題について語り始めた。
例えば、人員が異様なほど少ないこと。
それに伴う弊害と捜査の遅れ。
更に、そもそも、人員が少ないという原因。
ついでにちょっとした惚気話。

「……」
「どう思う？」
「爆発したらいいと思う」
「は？」
「いや、なんでもない。こっちの話だ。
ともかく、問題なのは人員の少なさであり、それによる弊害――
つまりは、捜査が滞ったり、そもそも捜査の手が行き届かないところがあったり、何より民間に被害が出ることも問題だし、つまりは限界がある、ってこと……かな」
「そういうことだ」
「……で、俺に何をしろと」

そこなのだ。問題は。
いくら警官である照井とそれなりに親しいとは言っても、所詮弘人はプログラマーであり、警察に対して意見が出来るような立場でも、ましてや人事に口出しが出来るような人間でもない。もしもそれができるなら、そもそもプログラマーなんてやってない。

「……風都警察署に就職する気は……」
「ない。というより、そもそも採用試験を通って、その上警察学校

を卒業しなきゃ正式に警察にはなれないだろう？　そんな時間も金も無いし、何より、そもそも適性検査で落とされるだろうよ。訓練に耐えられる気もしないし」

と、弘人は自身の腕を晒しながら言う。

細い。

というよりも、貧弱だ。

筋肉など見当たらない。

常日頃からドーパントとの戦闘に備えて鍛えている照井とは対照的に、ガリガリでひょろっこく、単に身長が高いだけで頼りなさげな雰囲気を醸し出している。ちなみに弘人の高校時代のあだ名は「もや栖（す）」である。

由来は言うまでもないだろう。

「……ああ、いや、待てよ？　俺じゃなくても、あいつなら、案外引き受けてくれるかも……」

「あいつ、とは？」

その問いに対し、弘人は少しばかり申し訳なさそうな表情をして、

「――多分、優秀な警官だ」

とだけ告げた。

――午後４時２６分　風都署前　道路

「多分」優秀であろう警官。
弘人に紹介されたその人物を訪ねるべく、片や自前のバイクを。片や専用の紅のバイク――《ディアブロッサ》に乗り込み、弘人と照井は風都署を訪れていた。
照井の場合は「帰参した」と表現するのが正しいのだろうが――ともかく。

「その優秀な警官とやらは、どこの部署に勤めているんだ？　公安か？」
「……いや、違う」
「では刑事課か？　内勤だとすれば、面識が無いことも納得できるが」
「それも違う。あいつが勤めてるのは――」

とても言いづらそうにしながら、弘人は搾り出すようにして答える。

「会計課……だ」
「……何だと？」
「だから、会計課だ。具体的に言えば、拾得物と物品の管理に当たってる」

信じられない、と言いたげな表情で、目を剥きながら照井は弘人を見据える。

「今でこそ大人しく会計なんてやってるが、その実、空手、剣道、柔道と、あらゆる武道において有段者で人間凶器とも言うべきやつだ。俺にとっては幼馴染にあたる……けど、昔から何かと技の実験台にされたりしてて。……正直、できれば会いたくない相手だ」

「……どんな男だ」

そもそも人間なのかどうか。少しばかり、照井は不安になる。

「いや、女だぞ」

「余計に分からん……！」

それは実はドーパントか何かか。

それともゴリラのような外見の人間なのだろうか。いずれにせよ不安になる照井である。

いずれにせよ、署内に入らねば何も変わらないし分からない。

そう考え、照井が署に入ろうとした――そのときだった。

「――――――――！！」

超音波、とでも表現すべき怪音が、周囲に響き渡った。

「何だ……？」

異様な――それこそ、まるで聴覚そのものを蹂躙されているかのような、奇怪な音響。
おおよそ、自然界に存在しうることはありえないだろう、凄まじいまでの金切り音。

――徐々に大きくなっていくその音に顔をしかめる人間が現れた頃には、照井もこの現象に対しての違和感を抱いていた。

「来栖、何かがおかしいと思わないか」
「奇遇だな。俺もそう思ってた」

この音が何なのか。何を暗示しているのか――その点に関してはいまいち分からずにいる二人だが、その発生源……否、発声源らしきものの予測だけは、なんとはなしにできていた。
すなわち――ドーパント。

「今聞こえてる音が何かはよく分からないけど……音か。なら、あくまでも一例ではあるけど、サウンド（Sound）とかノイズ（Noise）って線じゃないかな。あるいは、声だとするならボイス（Voice）、シャウト（Shout）、ソング（Song）。そんな

ところじゃないかと思うんだが……実際のとこ、見てみなきゃ分からないだろう」
「その通りだ」

言いつつ、照井はＵＳＢメモリに似た機器を取り出す。
ガイアメモリ――その一つ、アクセル（Ａccel）。仮面ライダーへの変身アイテムだ。
これだけでは無論、意味が無いが――ロストドライバーの一種、「アクセルドライバー」を用いることで、その体に深紅の鎧を纏い、風都を守る戦士――仮面ライダー「アクセル」へと姿を変える。
通常のドーパントであれば、そもそも敵は無いも同然である、そのはずなのだが――。

「――む？」

彼らの前に現れたそれは、ドーパントと表現するには――あまりにも歪（いびつ）だった。

まず、言葉を一言も発しない。
ドーパントの素体はあくまでも「ヒト」であることが殆どだ。
言葉を発することができないというドーパントはまず存在することはありえない。加え、そもそもドーパントとは、超人であると同時に「ガイアメモリの毒素によって少なからず精神を侵された者」であるのだ。
多弁にこそなりはしても、寡黙になるということはそうそうありうるはずはない。それこそ、元が動物でもない限りは。

それだけではない。
先程から、その足取りはどこかおぼろげであり、虚ろで確かなものがない。
まるで――そう。何かを捜しているかのように。
その姿がコオロギと酷似しているのは、何か意味があるのか。
そのように、弘人が考えたときだった。

《――――――――ッッ！！！》

衝撃。
怪物――とでも表現すべきソレが発したのは、声とも音ともつかぬ、奇怪な音波だ。
それも、先程のように、違和感を覚える程度のそれではない。
衝撃波とでも表現できるほどの爆音に変わっているのだ。

「ぐあっ……！？」
「っ――！！？」

耐えられない。
あまりの音響に、周囲のガラスが振動を起こし、そうしているうちに砕け散る。
その場に体を留めておくことができない。
そう感じたときには、既に遅かった。

「がっ！？」

照井が隣を見れば、既にそこには痩せぎすの友人はいない。
何故なら、当の弘人は既に、壁に叩き付けられているのだから。
それに気付いたときには、既にその音は止んでいた。

「来栖ッ！」

呼びかけるも、返答は無い。どうやら気を失っているらしい。
軽く舌打ちし、照井はアクセルドライバーを取り出し、腰元に据える。
その瞬間、ベルトが飛び出して装着が完了する。――これで、準備は完了。

《アクセル！》

ガイアメモリが、自らの内蔵する「記憶」――アクセルのそれと同じく、「加速」を宣言する。
ガイアウィスパー、と呼ばれる機能だ。これにより、メモリのスタートアップが完了する。

「変……」

身。
そう宣言すべく動き出した照井の腕は、しかし、ベルトに向かわなかった。

攻撃を受けたからではない。そうなる前に、照井は宣言を終わらせて変身している。
では、何故か。
その答えは、彼の視線の先にあった。

人間。
二人の人間が、照井と怪物の間に割り込んできたからだ。
一人は明朗とした印象の青年。もう一人は――なんとも表現しきれぬ、赤い怪異の右腕を有し、狡猾な印象を受ける、同年代であろう青年だった。

「まぁた面倒臭そうなヤミーを作り出しやがって……ウヴァの野郎、どんな欲望を使いやがった？」
「そんなこと悠長に喋ってないでアンク、早くメダル！」
「チッ……さっさと片付けろよ映司ィ！」

心底嫌そうな表情で、異形の右腕を持つ男が三枚のメダルを青年に投げ渡す。
その腰元には――ベルト。

青年は投げ寄越された三枚のメダル――赤いものと黄色いもの、緑色のそれを、順にベルトに嵌めていく。
直後にベルトを斜めに傾ける。そして、腰元の装置を手に取り――

一息に、それらをスキャン。

「変身っ！」

［タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ・タトバ・タットッバ！］

青年の姿に変化が訪れる。
鳥類をモチーフとし、複眼を有する頭部。
虎の凶暴性を秘めた腕部。
バッタに似、抜群の脚力を持つ脚部。

――その姿は。

「仮面ライダー……だと……！？」

――照井の知る、「仮面ライダー」に、酷似していた。

2話：Tの奔走／鳴滝の暗躍（後書き）

マンション日下部の管理人は時折天を指差します。
得意技はカウンターと上段回し蹴り。あとシスコンです。

あと、恐らくお分かりであろうと思いますが、
オリジナル第一号こと来栖弘人の部屋は９１３＝カイザ号室だったりします。
これからもきっとちょくちょくこの作品に出てないライダーの小ネタとか使っていくつもりです。いや、割と本気で。
なので、もしかすると、例えば津上食堂とか剣崎語学教室とか出てk……いや違うんだ。俺の悪乗りじゃないんだ。ただこれは……そう、乾巧ってやつの仕わｚ（クリスマ

あ、つい今しがた数えてみたんですけど、どうもオリキャラが十二人は出てくることになりそうです。
……多いなヲイ↑
ともあれ、メアリー・スー状態にならないよう気をつけながら物語を続けていく所存です。

つーか鳴滝が常識人。おかしくねえかこれ……（
ま、まあ、あれ、ディケイド夏の劇場版の鳴滝だってことで一つ。
あれ？　それにしてもおかしいぞ↑

そういえば完全に余談なんですけど、実は本編で使用されるオリ龍騎ライダーのカードデッキに関していくつか裏設定が用意されてたりされてなかったり。いや、してるんですけど。すごくどうでもいい設定を。

ちなみに次回出てくる「幼馴染」って、ライダーのキャラじゃなくてオリジナルです。無茶苦茶思わせぶりですみません。

とりあえず、今回の話についての弁解を一つ。

……オーズファンの皆様ごめんなさい。
結果的に最後の最後に持ってくるしかなかったとはいえ、あの扱いは少し酷いと思った。今は反省している。
でもオーズは結構好きな部類のライダーですよ？

一番好きなのはWだけど↑
実際のとこ、単に私がハッピーエンド至上主義なだけなんですけど。だから多分、なんとなくではありますが、死人も最小限になりそうです。
本当、我ながら小説を馬鹿にしたような主義ですが。

こればっかりは譲れないという主張だけをして今日のところはお開き。

3話：Oの参上／メダルと鬼と鏡の中

「仮面ライダー……だと……！？」

どういうことだ、と照井は搾り出すように呟く。

確かに、その姿は照井の知る「仮面ライダー」と似ている。
翔太郎とフィリップの変身するW（ダブル）のそれと似たような複眼。
「変身」というワード。
アイテムによって形作られる鎧。――より正確には、肉体。
鎧、という表現も見受けられるものの、あれはある意味で正解であり、ある意味で間違っている。
その鋼鉄の肉体を見れば、あるいは鎧のようなものだと考えるだろう。

ダブルやアクセルは、それぞれ専用のドライバーを用いて変身する。しかし、あくまでもそれは、ドライバーを「仲介」しているだけであり、「ガイアメモリを用いている」という意味合いでは、ドーパントと何ら変わらない。マキシマムドライブという「機構」にしても、あくまでもガイアメモリの能力を「完全に」引き出しているだけにすぎない。それこそ、何かしら同様の機構さえあれば再現できる程度のものであり、必ずしもドライバーを介した変身者でなければできないこと、というわけではないのだ。

肉体の変質。

照井の見解では、眼前のライダー……オーズの変身プロセスは、それと類似する部分が散見された。
眼前のオーズのそれは、メダル状のエネルギーが肉体を透過し、直後に黒をベースとし、様々な動物をモチーフとしたライダーへと変身するというもの。
その「エネルギー」が、あるいは変質のカギなのではないか。

「ハッ！」

そこまで考えて、照井の思考は中断された。怪物へと向かってゆくオーズの姿が見えたからだ。
――そうだ、今は考えている場合では無い……！

「変……身！」

咆哮と共にアクセルドライバーにメモリを差し込み、右手でハンドルを回す。
その瞬間にメモリに内包された「加速」の記憶――そのイメージが、照井の周囲に湧き上がる。
直後に、照井の戦闘形態とも言うべき、紅の仮面ライダー、「アクセル」が、その姿を現した。
その手には、いつからその腕に握られていたか――《ディアブロッ

サ》から抜き出したエンジンブレードがあった。

「さあ、振り切るぜ……！」

まだ、あの異様な音波は周囲に蔓延している。
アクセルとオーズは、それぞれ変身したことで、この異常な音波を「異物」として、聴覚からはある程度シャットダウンすることが出来た。
しかし、一般人はそうもいかない。徐々に大きくなっていく音に翻弄されるだけだ。いずれ、最大出力であの音波を発せられたとしたら、鼓膜を破られるか聴覚が機能しなくなるか、あるいは――想像したくもないことだが、死んでしまうのではないか。
となれば、早めに決着をつけるべき――！

「はぁっ！」

アクセルがエンジンブレードを振りかぶり、コオロギにも似た怪物――コオロギャミーを、側面から斬りつける。
と同時、銀色のメダルのようなもの――セルメダルが、コオロギャミーから零れ落ちた。

「む……？」

当然ながら、照井はその存在を知らない。
この、セルメダルが「何」を示すのか、それを知る術は無いのだ。
あれ？　と、オーズはアクセルを見据える。唐突に助太刀に現れたアクセルに対し、何かしら疑問を抱いているのだろう。

「あの！」
「話は後だ！　今はこの怪物を片付けるべき――違うか！」
「え、あ、はい！」

返答と同時に、オーズはその腕の鉤爪（かぎづめ）を伸ばし、コオロギヤミーに飛びかかる。
ガキィ！　という音が響いたと同時に、セルメダルが周囲に散らばる。
セルメダルはヤミーの体を構成する重要な要素だ。
それが体から抜け落ちる――それはつまり、ヤミーに対するダメージを意味している。

「――――――ィィィ――――――！！！！」

ヤミーがけたたましいまでの叫びを上げる。
それは、傷を受けたことによる怒りでもなんでもなく――防御であり、攻撃を行うための叫びだ。

「うわっ！」

ヤミーに最接近していたオーズが、その被害をモロに被る。
音とはつまり、振動のことを言う。
空気が振動するからこそ耳に伝わることで音となる。ということは、音が大きくなればなるほど、その振動は増しているということになるわけだ。
耳に伝わら「ない」ほどの強烈な音は、つまりそれ相応の振動が周囲に発せられているということだ。
それを、肉体にダイレクトに喰らえば――並の人間であれば、最悪、体というそのものが液状化、ないしは発火していたとしても何らおかしくはないのだ。

オーズであったからこそ、映司は現状生存しているのであり、生身の状態で、目の前で喰らえば、死ぬ。

「っ……！」

エンジンブレードによる再度の攻撃を試みんとしたアクセルの動きが止まる。
多少でも離れていてこの威力――まともに喰らおうものなら、重傷は避けられえない。良くても鼓膜は破裂しているだろう。
それが分かっているからこそ、アクセルに関しては迂闊に手が出せていない。いや、手を出そうと思えば、いくらでも出せるだろう。
遠距離からの攻撃方法があるアクセルにとって、それは難しい話ではないのだから。
しかし、あまりにも大技でありすぎる。外した場合のリスクを考えれば、あまり使いたくはない、というのが本音だ。
せめて、ダブル――そのボディサイドの「トリガー」のメモリの能

力があるならば、その援護射撃を頼りに、最高の一撃を食らわせることができるのに――！

そう考えた直後だった。

「くっ……痛ぅぅぅ……！　こいつ、ヤバい……！」

「チッ……確かに耳障りだなこいつは――映司ィ！」

異形の右腕を持つ青年――アンクが、一枚のメダルを投げ渡す。
白いメダル――そこには、とあるを模した生物が描かれている。
それを受け取ったオーズは、ベルトの中心のメダルを引き抜き、改めて白いメダルを挿入。スキャナーを用いてそれを読み取った。

［タカ！　ゴリラ！　バッタ！］

コールと共に、オーズの胸部――オーラングサークルの、腕部を象徴する部分の色が白く変わる。
それと同時、腕部の形状が変化した。
野性を前面に押し出し、鋭利さを含んだ「トラ」の腕から、頑強さと重厚さを有す、「ゴリラ」の腕へと。

ただ殴りつけるだけではない。いや、そもそも、それだけであるとするならば、このメダルを渡す事も無かっただろう。
アンクが映司にこのメダルを渡したのには、明確な理由がある。

「おおおぉりゃあ！！」

現状、あのヤミーに近づくことは、ほぼ自殺行為も同然だ。それは間違いない。

――ならば、近づかずに攻撃すればいい。

必殺技、と呼べるほどに強力な――それこそ、周囲に被害を撒き散らすような攻撃ではなく、牽制にもなり、尚且つ、ダメージも同時に与えることのできる技。

……ロケットパンチ。

「――――キィィィ！？」

甲高い音――いや、既にそれは「声」という程度に抑えられている――が、コオロギヤミーの口から漏れだす。

本来、コオロギは生物的には「鳴く」のではなく、羽を用いて「響かせる」ものだ。

その活動を止めるか、ショックで音を分散させるか――いずれかの行為によって、存外にも簡単に、その音は止んだ。

「今ですよ！」

オーズの言葉に、アクセルは軽く頷いて答えた。

取り出すのは、「エンジン」のギジメモリだ。

アクセルはエンジンブレードの中部で、その刀身を「折り」、マキシマムスロットを露出させ、「エンジン」のメモリを差し込む。
その先端部分は、コオロギヤミーを向いていた。

《エンジン！　マキシマムドライブ！》

瞬間、ブレードに強大なまでの力が漲(みなぎ)る。

「はぁぁぁああっ！」

《エースラッシャー》。
アクセルの持ちうるマキシマムドライブの中で、唯一の遠距離～中距離に対応する技であり、この相手に対抗するに際して最も相性の良い技だ。

Aの字の形状をした紅のエネルギーが、コオロギヤミーの背を貫いた。
これで、最早音を発する手立ては無い。

残る手段は、逃げるのみ――。

そう思考したのかは定かではないが、気付けば、ヤミーは逃げる体勢に移っていた。
自身を構成するセルメダルを、「主」の下へ届けるために――。

だが。

《トリプル！　スキャニングチャージ！！》

その進路上には――再度、「トラ」のメダルを装填し、一本の剣――《メダジャリバー》を装備したオーズの姿があった。

既に逃げ場は――無い。

「セイヤあああぁぁぁ！！」

咆哮と共に、渾身の力を込めたメダジャリバーが振り下ろされた。

刀身が、ヤミーの肉体諸共に空間を切り裂く。

「空間」という概念そのものすらも裂き、断裂する必殺の一撃。

当然、それに一介のヤミーが耐えられるはずもなく、

――爆音が、周囲に轟いた。

――同日　午後3時12分　風都内　坂道

野上良太郎。少年は、そのように名乗った。

――果たして、この状況で暢気（のんき）に自己紹介などしていられるものかどうかということは置いておいて。

「こりゃどうもご丁寧に……俺は左翔太郎。しがない探偵さ」
「あの、それで、なんですけど左さん。イマジンは……」

そういえば、よく考えればそれこそが本題のはずなのだ。
やれやれ、と自身の迂闊さを呪いつつ、翔太郎は砂の怪物――イマジンに向き直る。
その形状は、どこか翔太郎の記憶している「カモメ」のそれと類似している。

「イマジン――っつったか？　もしかして、お前が今風都を騒がせてる連続失踪事件の犯人か？」
「違うっつーの。俺ァテメエの願いを叶えに来ただけだっつーの」

ガラが悪い。
というか、願いを叶えに来た――などと、そんな口調で言われても、ギャップに少しばかり辟易してしまう。
何だこいつは？

「騙されないでください、左さん」
「えあ？」

先ほどとはうって変わって、より強い意志を秘めた視線に射抜かれる。
まるで、ドーパントと対峙する翔太郎や照井と同等の――。

「イマジンの目的は、人の願いを叶えてあげることじゃなくて……その先、契約を満了した後、その人の過去、未来、今――『時間』を奪うことにあるん、です。絶対に、願いは言わないでください」
「あッ！？　テメエ、何バラしてやがんだっつーの！　つーか何でンなこと知って――」

まさか。と、イマジンの表情が強張る。
その返答として良太郎が取り出したのは、一本のベルト。

「まさかテメエ、電王！？」

危険を感じ取ったイマジンが、自らの肉体を実体化させる。
そもそも、イマジンは契約を行っていなければ、決して実体化することのできない存在だ。
本来ならばまだ、イメージの段階――翔太郎の思い描く「何か」を自身の外見として取り込んだだけに過ぎないはずなのだ。望みを受け入れなければ、その肉体を維持する事も不可能なはず。
となると、一度契約を満了した者が、そのまま別な人間に憑いた――と考えるべきか。
特殊なケースだが、ありえないことではない。
極端な話、遥か昔――それこそ、奈良や平安にでも飛びたいと願えば、手当たり次第に人間に憑き、契約を行っていくだろう。
その目的が何であろうと、その行為は許されざる行為だ。
良太郎は勢い良くベルトを腰に巻きつけ、更にもう一つ――定期券

のケースに似た器具を取り出した。

「――変身……！」

言葉と共に、ケースをバックルに翳（かざ）す。

《Ｓｗｏｒｄ　Ｆｏｒｍ》

次に聞こえてきたのは、軽快な電子音。
メロディと共に、光が良太郎の体を包み――そして。

「俺、参上！！」

――電王。その、ソードフォームと呼ばれる、赤い形態が姿を現した。
へ？　と、翔太郎が間抜けな声を発する。
先ほどまでの、どこかおどおどとした印象を持ったあの少年とは、明らかに違う。
何が、というレベルの問題ではない。根本――それこそ、精神そのものが置き換わったとしか思えない変貌ぶりだ。

「誰だお前――――――――！！？」

驚愕に叫ぶ翔太郎を尻目に、（傍から見れば）一人芝居のように、

電王が一人で喋っている。

「あァ？　おい良太郎、どうすんだよこのキザ三枚目。カメと被ンだけどよォ」
『ど、どうするって言っても……とにかく、まずはイマジンを倒さなきゃ……』
「それもそうだよなぁ、うぉうし！　行くぜ行くぜ行くぜぇぇぇ――――！！」

声を上げ、電王がイマジンに向かって突っ込んでいく。
組み上げるのは、剣――デンガッシャーと呼ばれる武器のソードモードだ。

「どォらあ！」
「うぎィ！？」

力任せに放たれた一撃が、イマジンの肩を掠める。
掠める――とは言っても、芯を外したというだけであり、体重を乗せられ、渾身の力を込められたその一撃は重い。
血液の代わりに漏れ出す砂粒が、そのダメージを物語っていた。

「ち、畜生が！　これでも――」
「甘いんだよォ！」
「ぶえェ！？」

反撃に転ずるべく放たれようとしたイマジンの口腔からの一撃も、電王が打ち上げ気味にデンガッシャーを口元に放ったことで封じられる。

「言っとくが、俺ぁ最初から最後までクライマックスだぜ！」
「いや、何言ってんのか分かんねーっつーの！」
「テメエが分かってなかろうがオレの知ったことじゃあねえ、なあっ！」

打ち下ろされる刀身が、イマジンを袈裟に切り裂く。
危険だ――イマジンがそう認識して、逃げ腰になったのを、電王は見逃さない。

「逃がさねえぜぇ……！！」

取り出すのは、変身に用いたものと同じ――ライダーパス。
それを、再度。変身のときと同じようにバックル部分に翳（かざ）す。

《Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ》

緻密に合成されたかのような電子音声が、完全（フルチャージ）に充填された事実を告げる。
それを確認すると、最早用済みと言わんばかりに、電王はパスを投げ捨てた。

「行くぜ……俺の必殺技！」

雄叫びと共に、まるで、拘束から解き放たれたかのようにデンガッシャーの刀身が分離した。

「パート2ゥ！！」
「ぎゃあああぁぁァ！？」

刀身が、電王の持つ柄の部分と連動し、イマジンの肉体を切り裂いていく。
袈裟懸けに一度、逆方向からもう一度。
そして。

「オラァァァ！！」
「ひでぶっ！？」

……
振り下ろす。
脳天に振り下ろされた必殺の一撃は、寸分違わずイマジンを断ち切っていた。

「へっ……決まったぜ」

自身の攻撃に対し、絶対の自信があるのか。電王は、イマジンを振り返ることは無かった。
そして、その自信を裏付けるかのように――爆音が轟く。
翔太郎は、ただその様子を、茫然とした様子で見ていることしか出来ていなかった。

――同日　午後5時29分　風都警察署前

音波を操る「コオロギ」のヤミーとの壮絶な戦いの後。
照井は、もう一人の「仮面ライダー」……オーズの変身者――火野映司から、口頭で様々な説明を受けていた。
曰く、先ほどの怪物は《ヤミー》といい、人間の欲望から製造されたものである。
曰く、それを作り出すのは人間の欲望であるが、直接的には《グリード》と呼ばれる存在であること。
曰く、あの異形の右腕――アンクにしてもグリードだが、今はそれほど害はなく、ヤミーを作り出すだけの力は無いということ。
曰く、それ以外の種類のグリードが風都にいるだろうこと。
近場に「クスクシエ」という多国籍料理の店舗があり、そこに居候しているとは流石に余談であろうが。

どれもこれも荒唐無稽な話だと思えているが――しかし、ガイアメモリの存在からして、そもそもオカルト臭いものなのだ。今更、この程度のことを非現実的と笑うことはできまい。

「……で、それはともかく、さっきはありがとうございました！」
「気にするな。風都を守ることは、俺の務めでもある。一人だけで戦わせるわけにもいかないからな」

言いつつ、照井は、つい先ほど映司から聞いた事実を反芻して考える。
あの腕だけ怪人は、曰く、刑事である泉信吾（いずみしんご）の肉体の生命維持装置を兼ねており、十分でも離れてしまえば、泉刑事の命が危険であるらしい。
――つまり、いくら危険なグリードとはいえ、倒すことは不可能。
また、オーズへの変身アイテムであるコアメダルを管理している関係上、離れて行動している際には変身ができない――。
ままならないものだ、と照井は思う。
同時に、この二人の関係が、「オーメダル」に依存し、互いに利用しあう危うい関係であるとも。
翔太郎とフィリップ、鳴海探偵事務所の面々とは対極に位置するような人間だ。照井はそう思った。

「……しかし、いずれそのグリードとかいう連中が現れるとするなら、俺と火野だけではどうしようもなくなる可能性もあるな。いずれ左にも詳細の通知はしておくべきか……」
「とか言って協力的な態度を見せつつ、横から俺のメダルを掻（か）っ攫（さら）っていく算段じゃないだろうな？」
「刑事さんがそんなことするわけないじゃないか……ですよね？」
「俺に質問をするな」

同時に向けられた「質問」に対し、照井は普段と同様の反応を返した。
映司はある程度照井の本心を見抜けているからか、その態度に対しては苦笑し、アンクは苛立たしげに照井を見据える。

「まあいい。とりあえず、続きは署内で……」

と。
そうして考えたところで、照井は近くで気絶しているであろう友人のことを思い出した。

「……話すことにしたいと思うから、先に署内の超常犯罪捜査課で待っていてくれ。すぐに向かう」
「あ、はい。分かりました。ほらアンク、行くぞ」
「俺に命令するんじゃねえよ。そのくらいのことは分かってるんだよ」

グチグチと零しながらも、アンクは映司の後をついていく。

この被害状況を鑑みて、周囲には救急車や警察車両などが乗り入れている。
案外、既に目を覚ましているか、既に病院に運ばれているかのどちらかであろう。
加え、そこまで遠い場所に吹き飛ばされたというわけではないのだ。
すぐに見つかるはずだ――。

そう考えた照井は、しかし、十分経っても二十分経っても、あの痩身の青年を発見することができなかった。
異常事態だということに気付いたのは、病院に連絡しても「来栖弘人」なる人間が運ばれてきたという事実は無い、と告げられた、その瞬間だった。

――同日　同時刻
――ミラーワールド

来栖弘人は、異様な場所に立っていた。
景色の全てが「反転」した世界――。そのように表現すべき、異様な場所に。
風都警察署のようにも見える。しかし、その造形はまるで逆。
まるで、鏡の世界。

そこで、弘人は気付いた。
これが、あの男――鳴滝の言っていた場所、ミラーワールドであると。
しかし、弘人にはこの場所に来た記憶は無い。
そもそも気絶していたのだから当然であろうが――しかし、奇妙な場所だ、と思う。

と、そこで弘人はもう一つ、別な事実にも気がつく。
視界が異様にクリアであるという事実。
聴覚が妙に研ぎ澄まされている事実。

――そして、モノクロの鎧を、身に纏(まと)っているという、事実に。

「な」

愕然とした様子で、弘人は叫んだ。

「なんじゃこりゃあああぁぁぁぁぁアァ――――――――――――――――!!??」

3話：Oの参上／メダルと鬼と鏡の中（後書き）

電王の出番少ないね！（

というか圧倒的すぎる件。いや、この場合、相手の能力が低かったという設定上、そうなっただけなんで……ファンの皆様申し訳ありません。

そして相変わらず出てこないディケイド組↑

この辺は使い勝手の問題ですね。

ほぼ分刻みで行動を描写している現状、彼らはまだ風都を調査（という名の観光）をしている段階ですので、ちゃんと出てこない理由はあるんですよ。あるんですよ！

対して、妙に多いW組。というか照井。照井は私の本来の口調と少し似てるので、動かしやすいというのがあります。翔太郎は元々主人公なので、今回は少し自重していただきました。二話から警察絡みで話が続いていますので、まだ変身はしません。

多分、2、3話後で変身するんじゃないかな、と思います。

次話でいきなり変身とかあるかもしれませんが（

まあ、進み具合はストーリー進行と同様、といった感覚で。

オーズは本編24話の放映後ですので、メダルはそちらに合わせています。

本編の進行に合わせてメダルの数も変動するかなーと。

オリ龍騎は基本的に多人数ですので、現状活躍の場は少ないんですが、そのうち侵食し始める気が……。

うわあ目立たせないようにしないと（

それでは今回はこのあたりで。

４話：Ａの強襲／鮫と蜘蛛

――午後５時３０分　ミラーワールド　風都警察署前

――鎧。

弘人の纏っているものは、まさしく「それ」だった。

仮面とか何とか、そういったレベルのものではなく、純然たる「鎧」。

甲冑、と言い換えてもいい。

何よりもまず先に思うのは、いつの間にこんなものを着せられていたのか、という疑問。

百歩譲って、ミラーワールドに来ることになったのは大目に見よう。

あの男――鳴滝の言うとおりであるならば、弘人は「巻き込まれた」立場にある。唐突に――それこそ、気絶している間に連れてこられたのだとしても、それは決して不思議なことではないし、むしろ自然な出来事であると思われる。

……しかしながら、この状態は何だ。

全身を覆う硬質な鎧。

妙に軽く感じる肉体。

研ぎ澄まされた五感。

――何もかもがおかしい。

そもそも、来栖弘人という人間の身体能力は、他人と比べて非常に低い。

視力も低く、常日頃からコンタクトを着用していても、１．０に満たないほどだ。

だというのに、今、この状況下では、そんな様子は一切見受けられ

ない。
むしろ、普段よりも余程冴えている――そんなフシさえある。

「……仮面ライダー、か」

鳴滝の告げた言葉を――そして、自身の知る、二人のライダーを思い返す。
そういえば、今の姿は、どことなく「仮面ライダー」と呼称される三人に、少しばかり似ているような気がする――と、弘人は自身を纏う鎧の造形を手で触れて確かめつつ、そう思った。

「……何にしても、まずは分を弁(わきま)えろ、ってね」

バックルに据え付けてあるカードデッキ、その中身において最も重要な「契約(CONTRACT)」のカードに関しては鳴滝からある程度は説明を受けている。とはいえ、「それ以外」については何一つ説明が無いままに鳴滝は去ってしまったし、弘人本人も知る由(よし)は無い。
ならば、実践あるのみ。
そう考え、カードデッキからカードを抜き出そうとした、その瞬間だった。

「おやおや……まだブランク体の雑魚ライダーが生き残っていたとは」

――異様に静かな空間の中で、低い声が響いた。
低い……というよりかは、むしろ、しゃがれた声とも表現できる。
それ故によく通り、聞き取りやすく――。
だからこそ、不気味な声。

ぞくり、と背に悪寒が走る。

――何か、ヤバい――！！

そう感じ、振り返った瞬間には、もう遅かった。

《ＳＴＲＩＫＥ　ＶＥＮＴ》

水色のライダー――その左腕の召喚機にカードが装填され、鮫を模したかのような手甲が出現する。
そして。

「ハァァァ――――！！」

莫大な量の水流が、弘人を襲った。

「うわあぁぁっ！？」

水――とはいえ、その速度は非常に速い。
ごく普通の人間は――いや、例え訓練を受けた人間といえど、大津

波に逆らって泳ぐことなどはできず、ただ流されるまま流されるだけだ。
それは、ライダーに変身したとはいえ、結局は人間の延長線上にあり――更には、一切の戦闘経験も無く、モンスターとの契約も行っていない弘人も同様だ。何一つ抵抗できず、流されるままに流れていく。

「がっ、あああああぁぁぁぁ……！？」

勢いのままに、壁に叩き付けられる。
唐突に過ぎる、ライダーの襲撃。
早すぎる、という思いと、しかしこれが普通なのではないか、という思いが交錯する。
いや、それよりも――！
弘人は壁に張り付けられるままに、どうにか右手を動かしてデッキからカードを一枚抜き取った。

（これか――！？）

そのまま、左腕にある、シンプルなデザインのバイザーの挿入口に、カードを滑り込ませた。

《ＧＵＡＲＤ　ＶＥＮＴ》

電子音が響き、弘人の両腕に一対の盾が出現する。
それを前方に持っていきさえすれば、何とか――。

「フンっ！」

バキィン！！

ならなかった。

少し気合を入れただけで粉砕されてしまった。

距離が離れたせいか、水流の勢いは弱まっている。しかしあの程度で壊れるものなのかアレは。

拍子抜けだ。

「ホラホラどうしましたか！　もう退場ですかねぇ！？」

一々癇に障る口調だ――弘人は軽く舌打ちしつつ、体を捻って水流から抜け出す。

直後にもう一枚のカードを抜き出し、バイザーに挿入する。

《ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ》

電子音声と共に、上空から一本の剣が落ちてくる。

弘人は迷わずそれを手に取り――そして。

「うおおおぉぉぉおおっ！！」

全力で後ろに向かって走り出した。

「あ、ちょ……え？　あ、えぇ！？」

呆気に取られた水色のライダーが、ストライクベントを使用した直後の、左腕を前に突き出した珍妙な姿勢のままで硬直していた。

……硬直してしまっていた。

結果、弘人を取り逃がしてしまったというのは言うまでもない。

――同日　午後５時３６分　ミラーワールド　地下駐車場

「――はあっ、ハッ、ハッ――……」

右腕にはそれなりに重い剣。全身には鎧。

いくら身体能力が向上しているとは言っても、この状態で全力疾走して、なお息をつかない人間がいるとすれば、それは相当の体力バカか、あるいはただのバカかのどちらかだ。

当然、普段運動しないもやし(弘人)では、すぐに体力が尽きるのは自明の理だ。

「……奴が追いかけてこなかったのは、唯一の救い、か」

少なくとも、この場で戦うことになれば、敗北(死)は確実だ。
あの場で戦うことになって、それでも逃げ切ることが出来たのは僥倖(ぎょうこう)だろう。何一つ対抗策を持っておらず、モンスターとの契約も果たせていないような状況下で戦うことはしたくない。

となれば、まずは何かしらのモンスターを探し出して契約のカードを使う必要がある。
しかし、それにしても適当なモンスターが見当たらないというのは、果たしてどうしたものか。

今のところ所有しているカードは使い切ってしまった。盾は役に立たなかったのだから、この剣も精々が護身用程度のものであると考えるべきだろう。

「――にしても、ここは」

恐らくは、風都署の近くのビルの地下駐車場だろうということは予測できる。しかし、地上に出ることはつまり、わざわざあの水色のライダーに見つかりに行くようなものでもある。
かと言って、この場を動かないことには、コトが進展しないかもしれない――。

――……ままならないな。

とりあえず、周囲を散策する必要がある。
そう考えて、弘人は軽く周囲を見渡した。

何も変わらない、風景が反転したという、それだけの、ほぼ、普段と同様の地下駐車場。
表記も何もかもが反転しているからこそ、何かしら違和感を覚えるのであり、それ以外は何も変わらない。散策に関しては特に不便は無いだろうし、現実と様々な部分が乖離している以上、現実世界に対して影響は無いだろうと思われる。
例えば、「立ち入り禁止」の表記があったとしても、取り立てて問題は無い。
開かない扉があったとして、壊しても現実に影響は無い。
……まあ、とは言ってもそれだけ強烈な音を立ててしまうわけでもあるのだが。
それ故に、あまり褒められた行為ではない。

さて、それでは本当にどうするべきかな、と弘人が考えたとき。

「――ようやく、見つけましたよ」

粘りつくような声と共に、水色のライダーが姿を現した。
左腕には、やはりあの手甲が装備されている。
この閉鎖空間であれを発動されてしまっては――危険だ。

「ええ、ええ。よくまあ逃げたものですねぇ」
「逃げなきゃ死ぬだろ……！？」
「まあその通りですが――しかし、弱い者から死ぬというのは、ある意味この世の真理では？」
「……ああ、そうか、よッ！！」

叫びを上げ、相手に向かって走りこみつつ、弘人は自身の右腕の剣――ライドセイバーを、水色のライダーに向かって振り下ろす。
瞬間――剣が折れた。

「折れたァ！？」
「ふん！」
「ぐあぁ！？」

直後にライダーの裏拳が弘人の鳩尾（みぞおち）に突き刺さり、勢いのままに吹き飛ばされる。

――脆い。
というか弱い。
何だこれ。死ねと申すか。

というより、契約を行ってないライダーの弱さが尋常ではないとするべきなのか。
相手の強さも相当のものだが――しかし、この弱さは、凄まじい。

「――何じゃこりゃぁ！？」
「やれやれ……ブランク体のことも知らないとなると、これは相当ですねぇ」
「こんなに弱いなんて、誰も思わないだろうが！？」
「まあ、いいでしょう。いずれにせよ、あなたをこの場で倒すことには変わり無いのですから」

――どうせですから、と、水色のライダーは左腕を構えながら告げる。

「――アビス。この名を冥土の土産に持っていくといいでしょう」

莫大な量の水流が押し寄せる。
防御――不可。
回避――不可。
軽減――不可。

――最早、どうすることもできない。

「うあぁぁぁぁっ！！？」

ただ、流されるままに流される。
体が引き裂かれそうな痛みに耐えつつ、弘人は思考する。
モンスターを見つけさえすれば、契約を行うことができる――可能性がある。
そうすれば、あるいは突破口が見えてくるかもしれない。勝機が見える、その可能性がある。

だが、この状況では――。

「が、っあぁぁ！！」

先程の焼き直し――そうとしか思えないような状況。
絶望的だ。

先程までなら、まだ手はあった。
そもそも、身体能力が低く、体術の心得に疎い弘人にとって、カードが残っているということ、自分の底を知られていないということは、ハッタリによって相手を打倒するに際して最も重要なことだった。
しかし、底は知られた。ダメージを負い、カードも全て――というほどではないにせよ、契約と封印のカード以外を全て失った今、対抗策は無い。

「むう！？」

諦めが胸を衝いたそのとき、アビスが苦悶の――あるいは、驚愕の声を上げ、水流を止めた。
何が起きたのか――そう思考したところで、弘人は、その理由を知る。
蜘蛛（くも）。
青い蜘蛛が――弘人の背後に迫っていた。

機械によって構成されたかのような、無機的な怪物。
少なくとも、人間にとって友好的な関係とは言い難いだろう。
その複眼は、全てが弘人へと向いていた。
生きている、とは言いがたい。
しかし、感情があるとすれば――それは、自身の領地を侵害されたことによる怒りであろうことは、想像に難くない。

「チッ……いつの間にコアミラーに――」

アビスは、蜘蛛と弘人との延長線上にある鏡を見つつ、苦々しげに呟く。
元々、アビスにとっては、そもそも弘人がミラーワールドに来訪することすら、まして、この場所に来ることに関しては、完全に想定外だったのだろう。すぐに死ぬ程度の雑魚、としか感じていなかったはずだ。
想定外だったのは弘人にとっても同様だが。

「まさか守護者が現れるとは――いえ、防衛機構でしょうねぇ」

元々、あの青い蜘蛛――ディスパイダーは、コアミラーに近づく者を捕食するために存在するものだ。
例えば、今現在の彼らのように迷い込んだような者でさえ、その対象には含まれる。
仮に破壊したとしても、コアミラーが存在する限り、永遠に製造さ

れ続ける……それが、あのディスパイダーだ。
故に、アビスはこの場から早く離れなければならない、と感じていた。
それと同時に、ブランク体のライダー……弘人に関しては、最早死んだものである、と。
手間が省けた、と感じたのかもしれない。

――対して、弘人は仮面の奥で笑っていた。
狂気に苛まれたのでもなく、気が触れたというわけでもなく、ただ、笑っていた。
その笑みは、言うなれば――その存在を、待ち望んでいたかのような。

――まさに、僥倖。

ディスパイダーの牙が、弘人の首筋に迫る。
その瞬間――弘人は、契約のカードをディスパイダーに向かって翳(かざ)していた。

「何っ……！？」

その行動が予想外だったのだろう。
いや、あるいは――そもそも、あるはずのないことだと考えていたのか。アビスの口から、再度驚愕の声が漏れる。
次の瞬間には、ディスパイダーの姿はそこから消え失せていた。

空っぽ（ブランク）の鎧から、光が放たれる。
額とデッキには、蜘蛛を模した紋章が。
鎧の各所に、蜘蛛――ディスパイダーの足を模したような、朱色の装飾が形作られる。
色も、白と黒を基調としたものから、青――というよりも、藍色を基調としたものへと変貌を遂げる。
――そして、左腕のバイザーは、蜘蛛（ディスパイダー）の形状を模したそれへ。

「な……ん、だと……！？」

ありえない。そう言いたげに、アビスはかぶりを振った。
いや、現象としてはありえないことではないのかもしれない。しかし、これは――。

「くっ！！」

自問自答をしているような時間は無い。あの姿に慣れる前に、早く潰すべきだ。
そう思考し、アビスはデッキからカードを取り出し、バイザーに装填する。

《ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ》

電子音声と共にもたらされるのは、鮫の牙状の、二刀一対の太刀―

―アビスセイバー。
アビスはそれらを両手に構え、ライダーに駆け寄り――。
《ＡＤＶＥＮＴ》
瞬間、召喚されたディスパイダーにその刃を阻まれた。
「むうっ！？」
《ＳＴＲＩＫＥ　ＶＥＮＴ》
直後に聞こえてくる電子音声。その発生源は、当然――。
「ぜあぁぁぁぁあっ！！」

視界の外。
ディスパイダーによって阻まれた攻撃の、その向こうから――弘人の迎撃が待ち受けていた。
決して力強いとは言えない、その一撃――しかし、当然ながら、完全なライダーとなった彼の左腕――バイザーには、一つの細工が施されている。
蜘蛛の牙を模した手甲。
殴りつける、とい　うよりも、むしろ、突き刺す――運用としてはそんなものだろう。
しかし、冷静さを欠いている今、この場においては、弘人は「殴り

つける」という用途を選択した。
確かにダメージは与えられるが、しかし、それほどのものは期待できない。
――だが、それでいい。
顔面を殴られ、勢いのままにその体をのけぞらせたアビスにとって、弘人の存在が「脅威」であると認識されさえすれば。

「くっ……貴様ァ……！」
「――――――。」

一切の返答を見せずに、弘人はデッキから更なる一枚を抜き出そうと構える。
少しでも動きを見せれば、今すぐにでも「使う」ぞ、と言わんばかりに。

数秒の膠着（こうちゃく）。――それを破ったのは、アビスだった。

体の各所から、徐々に「ブレ」ていく彼がとった行動はごく単純――「逃げ」である。

「チッ……仕方が無い。この勝負、預けましたよ。こんな所で消えるわけにはいきませんからねぇ」

身を翻し、全力で駆けていく彼の姿は、どこか滑稽で――しかしながら、自身の命を守る、という意味合いでは、切実でもあった。

――静寂が戻ってくる。

それを確認し、弘人はほっと息をついた。

どうやら、ハッタリは成功したらしい。

適当に引き抜いたカードの効力がその場に適した能力で良かった、と思うと共に、自身の運に少しばかり感謝する。

果たして、あのまま攻撃を続けられていたら――と思うとぞっとしない。

次に引くはずだったカードを見れば、そこには《ＧＵＲＡＤ　ＶＥＮＴ》の表記があった。

……防御用。

追撃できない。

さて、どうするべきか――と思いをめぐらせると同時に、つい先程のアビスの様子を思い出す。

体の各所が粒子化していくあの現象――まさかとは思うが、あれが続いていけば、消滅、という結果がもたらされるのだろうか？

だとすれば、早くここから離れてミラーワールドから出るべきだ。

少なくとも、長時間いて良いことなどあろうはずがない。

そう判断し、弘人はもと来た道を引き返し始めた。

――同日　同時刻　某所

ひどく虚ろな空間の中に、男は立っていた。
部屋――と、そのように表現すべきなのだろうか。
部屋の中央には、簡素な机と椅子が設置されている。
何かしらの暗示だろうか。部屋には男しか存在していないというのに、そこには一対――二つの椅子があった。

机の上には何枚かの紙切れ。――そこには、意味があるのか無いのか、落書きが描かれている。
まるで、子供が描いたかのように乱暴な――それでいて、意味を持ったような。

「――イレギュラー」

その視線の先には、巨大な鏡――いや、彼が見ているものはその先、鏡の中の存在だ。
未だかつて存在しえぬ、珍妙な状況幾度と無く行われた事象の中で、しかし、それは自身が許容した覚えの無い異質な――何よりも、非常識な存在。

「……非常識(absurd)、か。」

しかし、時には非常識な存在も有用だ。
遅々として計画が進まない現状、ああいった不確定要素を取り込むことで、活性化させることができるかもしれない。
いや、そもそも、「今回」に限っては、不確定要素が多すぎるのだ。

何一つとして確定されたことは無い。
だからこそ――それを「正しい」方向へ修正することだ。

やるべきことは何も変わらない。

男は嗤(わら)う。

――戦え、と。呟きながら。

――同日　午後5時37分　風都署前

もしも――。
これは仮定の話である。

――もしも、唐突に目の前に人間が現れたら、どうする？

現象としての「唐突」ではなく、極めて物理的な意味合いでの「唐突」だ。
そう、まるで手品のように、本来存在しえぬ場所から、唐突に出現

した――そんな時、人間というものはどういった反応を示すだろう。

小野寺ユウスケは一人、仲間たちから離れて単独で行動を起こしていた。
理由に関してはごくごく単純――仲間の二人、具体的に言えば士と夏海の仲の良さが、その主要な原因だ。
居心地が悪い、と言うべきか。座りが悪い、とするべきか。
写真館にいるとき以外は、あの二人の邪魔をするのも、馬に蹴られて死ぬのも勘弁して欲しいし――といったところか。

そうして街を歩いていた折、騒ぎを耳にした。
自身の元いた世界で起きたような騒ぎに似ているそれだ。
ふと、ユウスケの脳裏に未確認生命体――グロンギ、と呼ばれる怪人のことが想起される。

――この世界にも、あいつらみたいな怪人がいるのか！？

だとしたら、急いで巻き込まれた人たちを助けなければ。

心底からお人よしの傾向があるユウスケにとって、「自身が」巻き込まれることに関しては特に問題としていなかった。
よって、歩いていたその足を速め、走り出す。

――そうして数分間走り続けた頃には、事態は既に終息していた。

それならそれで問題が無いのだが、拍子抜けの感は否めない。
しかし、それでも良かった。
――と、そのように考えていた折だった。
ユウスケの足元のガラス片が輝いたと思ったら――その瞬間、見知らぬ青年がそこから飛び出したのだから。
「……――え、何これ！？」
物理法則を超越した現象――と言っても、ユウスケ（クウガ）自身、なかなかに物理法則を超越したようなことをしでかしているのだが――に対して、ユウスケは驚愕の意を示す。
うわぁ。何これ。どういうことなんだろ。
というか、こんな光景をどっかで見たような――？
ま、いいか。ユウスケは軽く結論付けて、青年を見下ろす。
「……あの、もしもーし。大丈夫ですか？」
先程から身じろぎ一つしない青年に不安を抱いて呼びかける――と、次の瞬間、青年の目が「カッ！」と開いた。

「うおぉ！？」

「……――っ、間一髪、かな……ああ、くそ、危なかった……」

「……あのー」

「……あの野郎、絶対これを見越してたな。あー、腹立つ」

「ねえちょっとーすみませーん。もしもーし」

「うおぉ！？　だ、誰だ！？」

「今気付いたの！？　ていうかそれ、むしろ俺が聞きたいよ！」

それもそうだな、と、青年は立ち上がってユウスケの前に立つ。

……ユウスケよりも背は高かった。

割に痩せ型で、威圧感は無い。むしろ、風が吹いたら飛ばされてしまいそうな存在感の無さがある。

「……失礼。ええと、俺はプログラマーで……って言うより名刺出した方が早いか。こういう者です」

と、青年はユウスケに名刺を手渡す。

そこには、簡素に――来栖弘人、という名前とメールアドレス、職種だけが明記されてた。

生年月日は明記されていないが、見たところユウスケと同程度だろう――と、予想する。

「ええと、来栖？　多分年齢も近いだろうし、あんまり堅くならな

くていいと思うけど。俺、小野寺ユウスケ。一応、フリーター。よろしくな」
「ん。ありがとう。よろしくな、小野寺」
互いに言い合い、それぞれ手を差し出す。
「……で早速なんだけど、何で今、なんにもない場所から突然出てきたんだ？　マジック？」
「……あー、まあ、似たようなものかな。色々あって」
ふーん、と、ユウスケは納得したように頷いた。
本人がそのように言っているなら、余計な詮索をするのは野暮というものだろう。
「でさ、その……来栖って、ここで……風都に住んでるんだよな？　俺、っていうか俺たち、ちょっと前にこの街に来たばっかりでさ、ちょっと地理に疎いっていうか何というか……」
「案内をしてくれ？」
そういうことだ。
ユウスケも士も、どちらかと言えば行動的な性格であることは間違いない。
向こう見ずで無鉄砲。そのようにも解釈はできる。
確かにそれは間違っていない。行動的すぎる部分も多々あるのだから、そもそも言い返しようがないのだ。

とはいえ、その一方の――それも、唯我独尊を地で行く士は、ストッパーである夏海がそばにいる。
対して、ユウスケはそれなりに自制が利く。他人に対して友好的な性格もあり、士よりも、むしろ散策には向いている方だろう。
しかし、土地勘は無い。携帯電話は一応持っているが、それでなんとかなるわけではないし、依存するのも避けたいところだ。
となれば、現地の人間に案内を頼むのが筋――といったところか。

「そうそう、そういうことなんだけど……」
「……いいけど、その前に俺、まず行く場所があるからさ、それが終わったら、でいいかな？　警察関係の事情なんだけど」
「あ、ぜんっぜん大丈夫。ていうか、警察に行くならついでについて行っていい？」

何で？　と訊ねる弘人に、しかしユウスケは「なんとなく」という、取って付けたような理由を返した。

実際には、以前彼のいた――いや、本来の彼の世界、《クウガの世界》において、彼の想い人――八代（やしろ）が警察に所属していたから、というのがあるのだが、初対面の人間にそれを言うのは、流石に憚（はばか）られた。

「聞いても面白くない話しかないと思うけど？」
「ああ、うん。大丈夫。そもそも俺が案内してくれ、って頼んでる立場なんだからさ」

そうか、と返し、二人は風都警察署に向けて歩き出した。

街の惨状に関しては、痛ましいばかりとは思うが、それと同時――

新しい世界への期待に、ユウスケの表情は少しほころんでいた。

４話：Ａの強襲／鮫と蜘蛛（後書き）

「折れたァ！？」（出典：仮面ライダー龍騎　第一話）

はい、オリ龍騎です。
ほぼオリ龍騎でした。なんだよこれ。死ねよ俺。見事にほぼ自慰小説じゃありませんこと！？

はい、分かってます。本当にどうしようもないな俺は。
とにもかくにも、次回以降他のライダーの話を多くしたいと思ってます。

それはともかく本題。
今のオリ龍騎に関してなんですが、いくつか設定を設けています。
まず一つ、「入った鏡面からしか出ることはできない」
これ自体はオリジンにもあった設定なんですけどねー。中盤死に設定と化してましたけど。
ただ、仮に鏡やガラスが割れたとしても、結果「鏡面」は消えてないんですよね。
それこそ、粉々にでもしなきゃ「鏡面」という概念自体は消えません。よって、仮に割れたとしても、侵入→脱出は可能である、ということにさせていただきました。佐野も確か割れた鏡から出ようとしたことありましたし。
確か、設定的に無茶苦茶大きいはずのベノスネーカーが真司のヘルメットから出現したりしてましたし。大丈夫ですよね、多分。

あと、「ＴＶ版に登場したライダーは４人」です。
既にオーディンとナイト（真司）、アビスは登場済み。まあアビス

はディケイドからの出演で、龍騎のＴＶじゃないんですけど。
あと１人は誰でしょう、うふふ――っていうのは、これからの話になっていますが。
１０人に関しては、全員オリジナルです。

あ、これ念のため。
数え間違いじゃないですよ。これ割と本当に。
何度も言います。「ＴＶ版に登場したライダーは４人」で「オリジナルは１０人」です。
これ肝。

私的な設定としては、青ディスパイダーのＡＰは５０００くらいを妄想してます。ナイトサバイブのＦＶで倒されてますし。

5話：Dの幕間／破壊者と超人と「この世界」

――午後6時19分　風都タワー内　展望台

数ヶ月前の事件。
――大道克己、ひいては「NEVER（ネバー）」と呼ばれる傭兵部隊によって、
壊滅寸前まで追い込まれた風都タワーは、しかし、この数ヶ月の復旧作業によって、
ようやく、元の姿を取り戻すまでに至った。

とはいえ、かの事件の傷は深い。街のシンボルとも言うべき巨大な風車は、
現在はその動きを止めざるを得ない状態で、復興作業は依然続けられている。
展望台に関しては難を逃れたものの、客足は、以前のように多くはない。

「それでも」。
それでも、風都の名所――どころか、シンボルであることは間違いないのだ。
当然、観光スポットとしての機能は高く、相応に観光客は多い。

「へぇ……ここが風都タワーですか」

――そして、永遠の旅人とも言える彼らもまた、情報収集（ほぼ観光）のため、この風都タワーへ来訪していた。

「おい夏ミカン、あんまりはしゃぐな。恥ずかしいだろうが」

「そんなにはしゃいでません。それより士くん、この世界はどんな世界なんですか？」

来訪してから数時間。士と夏海は、この時間を用いて風都の各所を巡っていた。
士の専用バイク、《マシンディケイダー》の地力があれば、二人乗りとて容易だ。
特にこれと言って問題も無いままに、彼らは風都の各所、それこそ観光名所などを回ったりなどしていたのだが……。

「大体分かった」

「……本当ですか？」

「ああ、この街を回ったおかげで、大体な」

ただ無目的に風都を駆け回っていたわけではない。それこそ、「観光」だろうとも、それなりに意味はある。
例えば――。

「この街のことはよく分からん。が、以前言ったと思うが、ガイアメモリの噂が絶えない部分を鑑みるに、
この世界のベースは『W(ダブル)の世界』だろうな」

「ダブル……って、以前士くんが言っていた、大ショッカーを倒すのに、力を貸してくれたライダーですか？」

「俺だけでも充分だったがな」

相変わらずの、唯我独尊な台詞だ。
しかし、こんなことを言いつつも、心の底では士が仲間と信じた者には、
絶対的な信頼を置いていることを夏海は知っている。

例えば、クウガ(ユウスケ)。これまでの旅で仲間となったライダーたち。ディエンド(海東)などもそうだ。
――当然、そこにはキバーラ(夏海)も含まれる。

「だが、本質的に『そうだ』とは言いがたい。
――実際、俺はここに来るまでに、何回かこの世界に『あるまじき』ものを見たからな」

「何なんですか？」

「――ミラーモンスターだ」

はい？　と、夏海が首をかしげる。

――……そういえばそうだった。

よくよく考えてみれば、夏海に《龍騎の世界》での記憶はない。
龍騎――辰巳シンジを除けば、あの世界での戦いを記憶しているのは、唯一、士のみ。
そして、ユウスケにしても夏海にしても、あの世界での会話は一切記憶していない。
――そもそも、あの世界で過ごした時間は、「無かったこと」になっているのだから。

「……面倒臭ぇなあ。
いいか？　ミラーモンスターってのは、つまり龍騎の世界に存在する怪物だ。
そしてそいつらは、基本的に鏡の中の世界――ミラーワールドに住んで、隙あらば人を襲う。

で、俺たちが行った龍騎の世界のそいつらは、駆逐されて野良はいなかった。
唯一存在してるはずの、デッキに封印された奴らは出てくることはねぇ。
が、この世界では、野良もライダーも、存分にいるってことだ」
「つまり、この世界にはそういう怪物がいる……んですよね？」
「だけじゃねえ。超人（ドーパント）もいるだろ。
写真館の背景ロールを見たとこ、この世界は他のライダーの世界も混じってやがる。
俺はさっき、不自然なくらい道端に砂が積もってるのを見た。つまり、イマジンもいる。
電王もどっかにいるかもしれねえな」

士に言われ、夏海はふと思い返す。
電王の世界――そして、そこで出会ったイマジンと、時の列車。
この世界にも、同様の存在があるということだろうか？

「どっちにしたって、やるべきことは変わらねえ。
この世界のライダーを捜し当て、俺たちの役目を果たす」

とはいえ、お目当てのライダーがどこにいるのかは、未だに知ることが出来ていないわけだが。

ダブルか。電王か。龍騎か。それともオーズなのか。
オーズの姿は未だ知れない。である以上は、まずは情報を集めることが先決なのだが。

「……ったく、こっちから騒いで引き摺り出してやろうか」
「士くん、あんまり物騒なことを言っちゃだめですよ……」
「知るか」

とはいえ、こんな風に士が憎まれ口を叩くのはいつものことだ。
その言葉が本気だと思ってはいない。
さて、これからどうするべきだろう？

――同日　午後６時１８分　風都警察署　超常犯罪対策課

超常犯罪対策課の部屋の中には、６人ほどの人間がいた。
一人は、言わずと知れた風都署の顔、照井竜。
もう一人は、彼の友人である、来栖弘人。
他、４名のうち２人は、風都への来訪者――オーズこと火野映司。
そして、もう一方は、欲望（グリード）の怪物である、アンク。

部屋の片隅に立っているのは、曰く、「旅行者」である、小野寺ユウスケ。

……本来、この部屋で二番目に高い地位にあるはずのの刃野刑事は、しかし、妙に肩身が狭い思いをしていた。
彼よりも立場の低い真倉刑事がこの場にいないことも、その原因の一つだろう。

だろう――が、そもそも、この場にいる人間は、その殆どが「仮面ライダー」と呼ばれるべき歴戦の戦士だ。
……妙に感ずるこの威圧感はそれが原因であると、刃野刑事は知る由も無いが。

「グリードにヤミー、それに、オーズ……か。
眉唾物の話ではあるが、実際にこの目で見ては、信じる他あるまい」

「チッ……俺からすれば、お前らの――ガイアメモリか？
アレの方がよっぽど眉唾物だ。胡散臭ぇ……」

「刑事さんも、グリードには言われたくないだろうけどな」

「うるせぇぞ映司ィ！」

苦悶するような照井の表情からは、この状況に対する不安がありありと見て取れる。

――そもそも、増加するガイアメモリ犯罪に対応しきれていない現状、
新たな勢力が現れれば、そもそも既存の犯罪に対応することも難しくなる可能性がある。

行方不明者の増加。
その犯人がヤミーであるとは、その性質上、あまり考えられることではない。
かと言って、ガイアメモリを用いることで、そうしたことが行えるとは、
――考えられないことではないにせよ、そういった特性を持ったガイアメモリは限られている。
特に、ミュージアムが壊滅した現在、そう容易くガイアメモリを製造できるはずは無い。

――では、別な理由があるのだろうか？

それも、あるいは一つの可能性としては想像はできそうだ。
第４の勢力。いや、この場合、第５の勢力の登場も考えられる。
そこまで行けば、流石に憂鬱だ。たった２、３人で対抗できるうるものだろうか……？

何はともあれ、すべきことはおおよそ定まった。

「火野。互いに事情はあるだろうが、我々に少しばかり力を貸してほしい。
俺も、時間が許す限り、お前たちに力を貸そう」

「ハン、誰が貸『はい、当然ですよ！』映司ィィ――――！！」

「アンク、逆に考えてもみろよ。俺たちが刑事さんに協力すれば、刑事さんも、俺たちに協力してくれる、ってことだぞ？
強いヤミーが現れたとき、手伝ってくれる人がいればそれだけ助かるじゃないか」

「俺のセルメダルが掠(かす)め盗(と)られるかもしれねえだろうが！
それに、必要のないことにまで関わる必要はない！」

「刑事さんはそんなことしないって！　それに、できるのにやらなきゃ、死ぬほど後悔する！
それにいつも言ってるだろ！　人の命より、メダルを優先させるなって！」

「俺はメダルを優先しろって言ってんだよ！」

剣呑とした雰囲気が周囲に満ちる。

アンクと映司の痴話喧嘩は、本人たちにとっては「いつものこと」に過ぎない。

彼らの関係を一言で表すとすれば、それは「利害関係」という言葉がまず当て嵌(は)まるだろう。
アンクは、映司の力を――いや、オーズの力を借りなければ、メダルを得ることはできない。
映司は、アンクに体を乗っ取られている刑事――泉信吾を死なせたくない。

そうした事情がある以上、彼らは自身の得る「利」のため、
――あるいは、自身の信念のため、互いを利用しあっている。
故に、妙に険悪な雰囲気になってしまうのは仕方が無いことだろう。

――そんな折、ユウスケはふと、先程の発言を思い返していた。
ガイアメモリ。グリード。セルメダル。
……まさか？
ユウスケはなんとなしに、自身の隣に立つ弘人に話しかける。

「なあ、来栖。ちょっと聞きたいんだけどさ」
「ん。どうしたんだ、小野寺」
「い、いやぁー……来栖って……ほら、そのー」

仮面ライダーを知っているか？
……などとは、言い出し辛い。
そもそも、全ての世界で同様に「仮面ライダー」と呼称されているのか、その部分に関しては非常に曖昧なのだ。
例えば、ユウスケは以前、「未確認４号」と呼称されていた。

以前に渡った「響鬼の世界」に至っては「鬼」だし、
「キバの世界」では、「ファンガイアの鎧」だった。
……となると、この世界ではどんな呼称やら。
あるいは、この会話の中で出た「オーズ」とやらがそれに当たるのだろうか。

「仮面ライダー……って、知ってる？」
「うん。そりゃあまあ」
「嘘ッ！？」

やった、と、ユウスケは胸中で喝采を挙げた。
こんなにも早く――しかも、容易に見つかるなんて！
夢か何かじゃなかろうか。いや、だとしても嬉しいものは嬉しいものだ。
よし、と小さくガッツポーズをしつつ、ユウスケは更に問いかける。

「それって、誰だか分かる？
あ、実は俺も、その仮面ライダーでさ」

「……小野寺。仮面ライダーっていうのは、自ら名乗るものじゃないぞ」

「へ？」

――先程までの来栖とは違う、冷ややかな視線。
少しばかりの疑問と困惑を覚えながら、ユウスケは弘人の言葉に耳を傾ける。

「仮面ライダーっていうのは、この街を――風都を守る者に贈られる称号なんだ。
そして、それを名乗っていいのは、この街においてただ2人――いや、3人。
今まで2人、自ら仮面ライダーを名乗ったやつらは、皆この街の平穏を脅かしてきた。
……だから小野寺。可能な限り、この街でそうやって軽々しく『仮面ライダー』を名乗るべきじゃない」

「ご、ごめん、俺、そんなこと知らなかったっていうか」

「いや、知らない以上は仕方が無いことだろうけど……しかし小野寺。
つまりアレか？　――お前、何かしら超人的な能力でもあるって言うのか？」

「え」

あるか無いか、と言われれば、間違いなく――ある。
だが、それを、今知り合っただけの一般人に言ってもいいものか。
――そんな風に逡巡している姿を見て、何か感ずる部分があったのだろう。
弘人はにやりと口角を吊り上げた。

「ほォ――――う、そうかそうか。あるのか。
是非見てみたいものだな、小野寺君」

「な、何を？」

「ははは。そんなの、無論『変身ッ！！』でござあすよ。
ほれほれ、この街のライダーだってそうやって変身するんだしさ、
小野寺だって同じようなことするんだろう？」

より具体的には「変……身ッ！！」と「「変身！」」が混在している状況にあるわけだが、それはともかく。

「い、いやあ、ほら、一般人の目の前でやるのには、抵抗があるだ

ろうし？」

「そうか。ならいいや」

存外にあっさりと引き下がる弘人に、ユウスケは多少肩透かしを食らったような感覚を覚えた。

自己顕示欲にも似たものだろうか？

少しだけでもいい。目立ってみたい。自分の力を他人に誇示したい。それは誰でも持っている欲望だ。別段、疎まれたり憂えたりすべきではないものだと理解はしている。

――ただ、ユウスケは少しばかり不安を覚えた。

先程までの会話の中に、幾度か出てきた単語――グリード。

欲望を糧とし、欲望によって育まれ、欲望によって怪異を作り出す者。

これだけ小さな欲望――そもそも欲望とすら呼べない小さな遊び心によって、

ヤミーを作り出せるのかは、ユウスケには分かっていないが。

――当然ながら、作り出すことはできないのが真実である。

……と。

そんなことを考えていた折だった。

「た、た、ったたたた、大変です照井刑事――――ッ！！」

「どうした、真倉刑事……！？」

勢い良く扉が開かれ、つい先程まで買出しに外出していたはずの真倉刑事が姿を現す。
恐慌、とすら表現できるほどに慌てふためいている彼の姿からは、普段、権力にモノを言わせ、強者に媚を売っているような態度は見受けられない。
突発的な事態に遭遇して困惑している――そんな印象すら受ける。

「じ、じじ、実は、風都タワーにドーパントがっ……！！」

「何だとっ！？」

どういうことだろう。
まさか、またあのときのような、テロまがいの行為を――？

「詳しく報告しろ、真倉刑事」

「は、は、はい。実は――」

――午後６時２９分　風都タワー内　展望台

流石に、こんな高所――それも、望遠鏡から外の様子を眺めたとしても、
士たちの望む情報が得られるわけが無いのは確かだった。
仮に街中で戦闘が行われているとすれば、その選択は間違ってはいない。
――それが早ければ、あるいはアクセルやオーズの戦闘を見る事もできたかもしれないが。

「チッ……無駄足か。仕方ねえ。夏海、帰るぞ」

隣にいるはずの夏海にそう呼びかけてみる――も、反応はなし。

「夏海？」

疑問に思い、先程までは特に気にも留めていなかった、自身の隣を見据える――も、そこに夏海の姿はない。
あいつ、はぐれたな……などと、自身の非を一切考えずに夏海の姿を捜していると――いた。

どこの誰とも知れぬ薄汚い男。――が、倒れたその場に、夏海は心配そうな表情で立っていた。
陽も傾いてきた時間帯ということもあり、周囲に人間はいない。
誰に助けを求めるべきか、分かっていないのだろう。

……そもそも、こちらの世界で携帯電話が通じるかどうか。
ＡＥＤは近場に見つからない。
――どうしよう。そう考えているところで、士は夏海へと駆け寄った。

「おい、夏海。どうしたんだお前」

「あっ、士くん……この人、さっき急に倒れて。どうしたらいいんでしょう……」

「放（ほ）っとけ。そのうち誰か来るだろ。面倒なことにならないうちに帰るぞ」

「そんな冷たいこと……あの、大丈夫ですか？」

チッ、と軽く舌打ちをしつつ、男に近づいて様子を確かめる。

「おいおっさん。こんな場所で寝るな。それともこの暴力女にでも殺(や)られたのか？」

「士くん、あんまり冗談が過ぎるとコレ(笑いのツボ)ですよ」

「大丈夫かー！　おーい！」

夏海が親指を構えた瞬間、士はこれまでとは打って変わった態度で男に接し始めた。

……どうも、戦いを経ることで夏海の「笑いのツボ」は、パワーアップしているフシがある。
それこそ、調整も笑い方も実に多彩になってきており、ついこの前には涙が溢れるほど笑わされ、
あるいはその次の日に、息も絶え絶えに――1分間息を吸えずにもがいていたこともあった。
死ぬ寸前で止めてくれたのには驚いたが。

「……なん、で。なんで、……」

うわごとのように男の口から漏れだす言葉は、しかし士や夏海の耳には届かない。

「――何で、俺ばかりが……こんな……貧乏クジを……」

「おっさん、生きてるなら起きろ。病院に行くなら自分で行け」

「士くん！」

「……ぐう、……うううう……何故、俺が……」

呻き声。――しかし、それはやはり、士や夏海にとっては雑音のようなものに過ぎなかった。

「……おい夏海、お前何か言ったか？」

「言ってませんよ……」

「……ち、く……しょう……。……こう、なったら……全部、全部……！」

「は？」

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ァァァ！！」

虚ろな目をしたままに怒りの形相を浮かべた男は、
――叫んだその瞬間、勢い良く起き上がり、懐から一本の棒状の器具を取り出した。

「なっ……お前、それはっ！！」

「畜生、畜生畜生畜生！！　こうなったら、こんな場所ブッ壊してやるァァァ――――！！」

《アーティラリィ（Artillery）！》

「うおおおォォォァァァ――――！！」

……
ギチギチと。

その肉体の組織が、地球の記憶の示す火器のそれへと変貌を遂げる。
およそ現実にありうるはずのない奇怪な光景に――夏海は、声も出せずに見ていることしか出来なかった。

「こいつ……！　ドーパントだったのかよ！
夏海、離れてろ！」

「は、はい！」

告げつつ、士は腰元に携行している、本にも似た機器――ライドブッカーから一枚のカードを取り出す。
そして、バックル――ディケイドライバーを腰元に当て、装着。
そして、ドライバーの両側に位置するサイドハンドルを開く。
眼前（ドーパント）の敵へと、力を閉じ込めたライダーカードを見せ付けるように構え、そして。

「変身ッ！！」

《ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ　――［ＤＥＣＡＤＥ］》

ライダーカードをバックルに装填。勢いよくハンドルを閉じ――その力を自らの肉体に投影する。

仮面ライダー、ディケイド。
世界の破壊者と呼ばれるライダーが、その姿を現した。

「がああああァァァッ！！」

瞬間、アーティラリィ・ドーパントの両腕に装着された砲塔がディケイドに向かう。
――発射（ファイア）。
その声と共に、幾重にも銃弾が撃ち放たれた。

「チッ……この野郎！」

側面に向けて転がり込みながら、ディケイドはライドブッカーを拳銃状――ガンモードに変形させる。
引き金を引き、エネルギー状の弾丸をアーティラリィ・ドーパントへと撃ち出す。
――も、大したダメージは無いように見受けられる。

「くっそ、効いてんのかよ！？」

「ごあああぁ！！」

「のわっ！！」

肩に装備されている長大な砲塔が火を吹く。
なんとかそれを避けることまではできたものの――しかし、周囲に被害は拡散する。

「ンの野郎ォ――バカバカ撃ちまくりやがって。だったら！」

取り出すのは一枚のカード。
――最も神に近しい、金色の戦士。

≪ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ ――［ＡＧＩＴＯ］≫

「そんでもって……！！」

≪ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ ――［ＡＧＩＴＯ ＦＬＡＭＥ］≫

瞬間、ディケイドの姿に変化が訪れる。
マゼンタ色のアーマーから、神の力を持つ金色の戦士――アギトへ。
そしてその色も、超越肉体（グランドフォーム）の金から超越感覚（フレイムフォーム）の赤へと移り変わる。
直後、ディケイドライバーから武器――フレイムセイバーが排出された。

「お、おお、お、オオォォォオオォォォッ！！」

それを知ってか知らずか――アーティラリィ・ドーパントは、
その瞬間に左腕のマシンガン状の砲塔をディケイドアギトへと向けた。

「――――ッ！！」

だが。
その弾丸は全て、ディケイドアギトに届く前に、断ち切られた。
――超越感覚。
それはつまり、ありとあらゆる感覚が人間を超えたことを意味する。
銃弾の軌道が見える。

体が動く。

――であれば、打ち落とさない理由はあるまい。

「まだまだ行くぜぇ……！」

次にディケイドアギトが取り出したのは――青のカード。

《ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ　――［ＡＧＩＴＯ　ＳＴＯＲＭ］》

ディケイドライバーのコールと共に、次なる武器――ストームハルバードが排出される

そして、またもその姿は超越感覚（フレイムフォーム）の赤から、超越精神（ストームフォーム）の青、

――敏捷性に優れた形態へと変化を迎えた。

「はぁぁぁ――――――！！」

「ぐぅっ！？」

ストームハルバードの刃が、アーティラリィ・ドーパントの肉体を

傷つけていく。
少しずつ。――しかし、確実に。
いくら防御能力が優れていようとも、連続して同じ箇所に攻撃を受ければ、当然ながら、相応に傷つく。
――故の、絶対的なまでの連撃。

「かってぇなあ、くそっ……おらおらおら！」
「こ、の……羽虫が、邪魔だッ！！」
「ぐあぁぁぁぁっ！？」

直後、アーティラリィ・ドーパントの腹部の大砲――らしきものが火を吹き、ディケイドアギトの胸を焼く。
士くんっ！　という夏海の声は、しかし強烈なダメージを負った士には――届かない。
――だが。
変身は、未だ解除されていない。
本当に致命的なダメージを受けていれば、アギトへの変身どころか、ディケイドへの変身も解除されていることだろう。
だが、未だディケイドは、「アギト」のままだ。

「ぐう、おおおおぉぉ！！」

追撃のつもりだろうか。肩のキャノン砲がディケイドへと向けられる。

――だが。

《ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　――Ａ，Ａ，Ａ，［ＡＧＩＴＯ］》

ディケイドアギトの足元――そこに、エネルギーが凝固する。
それが形作るのは、紋章。――アギトの、紋章。
先程まで、一切の動きを見せていなかったディケイドアギトの角――クロスホーンは、今は、展開を終えていた。

「はあああぁぁぁ――――――！！」

そして、砲撃を避けるようにして、ディケイドアギトがその場から飛び上がる。
胸元に突き刺さる、必殺の飛び蹴り（ライダーキック）。

「ぐっ、あっ……」

アーティラリィ・ドーパントの向く、その逆の方向に――ディケイドアギトが降り立つ。
ディケイドアギトは、一切振り向かない。
――まるで、その必要が無い、とでも言うかのように。
だが。

「……ぐあっ！？」

ディケイドアギトの背後から、幾度かの砲撃が発せられる。
無論、振り返ることをしないディケイドアギトは、それに気付くことはない。
――ただ、撃ち抜かれるままに撃たれているだけだ。

「う、ぐ、うあああぁぁぁあ！？」

その砲撃が終わったそのとき――ディケイドへの変身が、解けた。

「士くんっ！？」

「ぐあ、くっ……逃げろって言っただろうが、夏海ッ！！」

「で、ですけど……」

「……」

「ひっ」

――幽鬼。

まさにそう表現すべき鉄の塊が、彼らの前に立つ。

殺される。

そう、夏海が死を覚悟した、そのとき。

どういう訳か、アーティラリィ・ドーパントは姿を消していた。

――まるで、本当の幽霊のように。

――午後６時４２分　風都警察署　超常犯罪対策課

「身元不明の男がドーパントに変身。同じく、身元不明の男が、
……ドーパントかどうかよく分からないものに変身したらしいんですが、
どうもピンク色の、バーコードみたいな形のドーパントは、一緒に観光に来たらしい少女を守ったようです。
もう片方……重火器の塊みたいなドーパントは行方知れず……現在、逃走中です」

照井は、真倉の報告を聞いて渋面を浮かべた。
……こんなときにドーパント騒ぎとは。本気でその通りだとは思ってはいないにせよ、
自分たち――というよりも風都には、何かが憑いているのではないかと本気で勘ぐってしまう。

「仕方が無い。火野、君たちはしばらく滞在先から出ないでおいてくれ。
来栖。少しばかり手伝ってくれ。左や所長にもこの件を伝えよう。
バーコード……ドーパント？
のことについても調べる必要があるだろう。それと、そちらは…

…」

「一般人だ。どうも旅行者らしい。今知り合ったばかりでよく分からないけど、
街の案内を頼まれたしな。とりあえず、事件が解決するまでは映司たちと同じ扱いで大丈夫だろう」

「そうか……ところで来栖と火野は知り合いだったのか？」

「え、ああ、はい。以前旅先で会って」

「短大を出た頃、丁度学生で海外旅行に行く機会があってな。そのときにに知り合ったんだ。
確かあれは……ミャンマーだっけ？」

「いやいや、東ティモールでしたよ。東南アジアまでは合ってるんですけどねー」

そうかそうかはっはっはっは。
和気藹々とした様子で互いの旅先のことを話し出す二人に、辟易とした様子で、照井は頭を抱えた。

「……で、もう旅には出ないのか？」

訊ねる弘人に、映司は少しばかり表情に陰(かげ)を落とした。
――あのことは。
以前、映司が経験した出来事。
それは、到底他人には話すことができそうにない事象だ。
……辛かった。

「まあ、言いたくなければ無理に言う必要は無いよ。
……ともかく照井、俺はこっち(警察署)で可能な限り調査は進めておくから、
お前は翔太郎のところへ行ってくれ。必ずしも戦うことになるとは限らないが、
注意を促しておくに越したことはない」

「分かった。市民にも勧告しておこう。真倉刑事、刃野刑事、注意を促すよう放送を頼む」

「「はっ」」

想像以上に迅速な行動にユウスケが舌を巻いている中、照井がユウスケに声を掛ける。

「しばらくは滞在先から出ない方がいい。最悪の場合、巻き込まれる恐れもある。
……名前を教えてもらっても構わないか？」

「あ、はい。小野寺ユウスケです」
「小野寺か。……来栖、確か小野寺は、お前に案内を頼んだんだったな？」
「ん。間違いなく」
「そうだな……なら、丁度、道案内も頼める人材も知っている。この際だ。その場所まで案内しよう。いざという時のための駆け込み寺のような場所だ」
「あ、どうも……」

いつの間に決定してしまったのだろう。
いや、こういう場合――緊急時に限っては、警察の言うとおりにしたほうがいい。
以前からの経験によってそれは知っている。伊達に元の世界で警察官に惚れてたわけではない。
思い出したら悲しくなってきたことはともかくとして。

「ともかく、俺たちのすべきことは決まった。
……各々の最善を尽くす。今はそれだけだ」

5話：Dの幕間／破壊者と超人と「この世界」（後書き）

枠です。遅くなって申し訳ありません。
少々……というか、かなり切羽詰ってます。

とりあえず本編の解説。

アーティラリィドーパント……強引すぎまね。
モチーフというか、元ネタはVシネマのアクセルで出てくるであろう敵ドーパントの「コマンダー・ドーパント」。
あれが「指揮官」なら、俺は「火器」でいいんじゃねえか！？
……そんな安直な思想から出てきました。はい、正直ごめんなさい。
人間も一発屋です。次あたり逮捕されます（

ディケイドがあのドーパントにやられた理由は以下の通りです。
・大したことはないだろうという油断
・非力なストームフォームを選択したことにより、ダメージの通りが浅かった
・前半戦だから
・メモリとの適合率と侵食の度合い

……まあ、要するに出題編だから、ということですね。あら安直。

それでは今回はこのあたりで。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0222r/

仮面ライダー 26Riders[Ryuki]Another in 風都

2011年10月8日18時50分発行